

天草版『平家物語』の原拠本の研究

——研究史と本文の検証——

近藤 政 美

第一章 まえがき

天草版『平家物語』（〈天草版平家〉と略称）は、鎌倉時代に成立した和漢混交文の『平家物語』を室町時代末期の話し言葉に訳したものである。

イエズス会の外国人宣教師たちがキリスト教の布教活動、特に日本人に対する説教を有効に行うためには日本語の話し言葉を学ぶ必要があった。この書はそのためのテキストとして編集された。『平家物語』を右馬の允うまじょうの問いに応じて喜一きいち検校けんぎょうが語るという問答体を採用して、ポルトガル語式の写音法によるローマ字で綴っている。

1592年（文禄元年）にイエズス会の天草学林（熊本県）で刊行された。現在は大英図書館（British Library、大英博物館から1972年に独立）に所蔵されているものが確認されているのみの、天下の孤本である。

序文によれば、編者の不干みかんハビヤンが苦心したのは、『平家物語』の原文を尊重しながら標準的な日本語の話し言葉に書き直すことであった。室町時代には平曲の多くの流派が興亡し、『平家物語』もまた詞章が工夫され、転写を重ねて多くの異本が成立した。そのため、現在の読者がこれを室町時代の話し言葉の語彙・語法の研究資料として使用する場合、その原拠本がどのようになっていたかを推定して、比較することが重要である。が、長い期間にわたる諸先学の調査・研究にもかかわらず厳密な意味では特定できていない。

〈天草版平家〉の原拠本を探求するために、基礎作業として、次のことをした。

A 翻字文の作成

ポルトガル語式のローマ字で綴られた〈天草版平家〉の本文を漢字平がな交じりに翻字した。『天草版平家物語語彙用例総索引』（近藤政美ほか編、勉誠出版刊行。第1巻の

影印・翻字篇の翻字は近藤が作成) 参照。

B 『平家物語』 諸本の調査

『平家物語』 諸本(100本余り)の古写本・古版本を原本・写真・影印本によって調査した。そして、それらの本文を〈天草版平家〉の翻字文と対照して、原拠本との距離の遠近を推測した。結果を表示すると、次のようになる。

表1 〈天草版平家〉の原拠本の本文と現存の『平家物語』 諸本との関係

平家物語 (十二巻) / 〈天草版平家〉 (頁・行)	〈天草版平家〉の 原拠本に近い諸本の例		〈天草版平家〉の原拠本との距離	備考
[イ] 巻一～三 (3①～ 107⑨)	〈竜大本〉〈高野本〉 〈西教寺本〉など		かなり近い	一方流(〈早大本〉の類)・ 百二十句本(〈斯道本〉の 類)の語句が関与
[ロ]の前期 巻四～七 (107⑩～ 196⑯) [ロ]の後期 巻九～十二 (228⑤～ 408⑱)	〈斯道本〉 (漢字片かな 交じり本)	一次本文 (巻八は欠)	極めて近い	一方流(〈竜大本〉〈西教 寺本〉など)の類の語句 が関与
		二次本文 (断片・巻五 の一部)	最も近い	
	〈小城本〉 (漢字片かな交じり本) 〈鍋島本〉(平がな本)		かなり近い	
[ハ] 巻八 (196⑪～ 228④)	〈竹柏園本〉〈平松本〉		近い	一方流(〈竜大本〉〈西教 寺本〉など)・百二十句本 (〈斯道本〉の類など)の 語句が関与か

○諸先学の説に対して多くの新説を提出した。たとえば、『天草版平家物語の基礎的研究』(清瀬・昭57)では上表ロの範囲の原拠本の本文は〈斯道本〉の二次本文(断片が残存)と同文であると判断した。が、私は多くの諸本を調査して、〈斯道本〉の一次・二次の本文が同じ語句でもその口語訳が〈天草版平家〉の語句とはなりえないものの存在を発見した。そして、原拠本は二次本文そのものではなく、それらが一方流の古写本や〈竹柏園本〉に見られることから、他の範囲の原拠本の主軸として用いられたものと校合して形成されたと推測した。

C 語彙・語法の解釈等のための語彙用例総索引を作成

いずれも近藤政美ほか編、勉誠出版刊行である。

- (a) 『平家物語高野本語彙用例総索引』（自立語篇）
- (b) 『平家物語高野本語彙用例総索引』（付属語篇）
- (c) 『天草版平家物語語彙用例総索引』

○これらを用い、また推測した原拠本の本文との比較を重視して、多くの新説を提出した。次にそのうちの2例を示そう。

- (i) (六代の) 乳母^{めのと}の女房はそこはかともなうあこがれ^い行^いたに：

(386-14：〈天草版平家〉の原本の頁・行を示す)

「行^いった」「行^いって」には促音の脱落現象が見られた。〈天草版平家〉の「acogare ytani」を『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』（亀井・阪田：昭41）で「あこがれ^いる^いた」と翻字したのは誤り。「行^いた」とすべきであろう。原拠本に近い『平家物語』では「浮^{アコガレ}行^い」〈斯道本〉、「あこがれゆく」〈鍋島本〉とある。「行^いて」2例が〈天草版伊曾保〉（京大：昭38）では取り上げられるのに、〈天草版平家〉の「行^いて」「行^いた」が見落とされてきたのも、上書の翻字の不備による。

- (ii) 院の御所は大膳の大夫が宿所西の洞院であったれば、御所^いの体^いもしかるべから^いんと^いころ^いで（xicarubecaran tocorode）、(228-16)

「ん」は、『天草版平家物語本文及び総索引』（江口：昭61）で助動詞「ン（推量）」の連体形と解しているのは誤り。原拠本に近い『平家物語』では、「然ルヘカラス・サルトコロニテ…」〈斯道本〉、「…しかるべからざる所にて…」〈鍋島本〉などがあるから、助動詞「ズ（打消）」の連体形「ヌ」の母音が脱落したものであろう。

私は鎌倉時代の『平家物語』の語彙・語法の研究に取りかかって長い年月を過ごした。また並行して室町時代の天草版『平家物語』の語彙・語法の研究をも進めてきた。後者については、編者の不干ハビヤンが序文で制作の指針を次のように記している。

- ① わが師宣ふは：…、兩人相対して雑談をなすがごとく、言葉^{しよじや}のてにはは書^{しよじや}写^{しよじや}せよとなり：(序 1-29)
- ② 師の命に従って、…、この物語を力の及ぶところは本書^{ほんじよ}（平家物語）の言葉^{しよじや}を^なが^が違^{しよじや}へず書^{しよじや}写^{しよじや}し、抜き書きとなしたるものなり：(序 2-18)

私は〈天草版平家〉の原拠本の本文の探求にあたって、特に②項を重視した。が、①項も考慮するように努めた（検証の〔Ⅰ〕〈早大本〉「世・家・国・君」、〔Ⅱ〕〈斯道本〉「さだめて…」、〔Ⅲ〕〈竹柏園本〉「九月十三夜の月見の歌4首」など参考）。

序1.1 Docujuno fitoni taixite xofu.

2 **S** ore IESVS no Companhiao Padre Irmam co-
 3 q'ouo fatte s'õta banriuo touoxito xitamauazu,
 4 hõbõtaru cocami funauatari xite locusã fengino Fu
 5 iõni açouo todome . teuno minoriuo firome, mayo-
 6 yeru xujõ uo michibicanto xcijeiuo nuqinde tamõ
 7 goto cocomi xet nari. Yemio mata zõacu fujenno mi

26 xo core vouoxito iyedomo, nacanzzucu Yeizano jñno,
 27 monfaini na tacaqi Guenyé fõinno xeitacu teiqemo
 28 nogatarini xiqua arajitõ vomoi, coreuo yerande xoja
 29 xento fõlluruni nozonde, mata vaxaxi notamiõua:
 30 ma conõ feiqe uoba xomotno gotoquni xezu, riõ-
 31 an aitaixite zõtanuo naluga gotoqui, cotobano teni-

序2.1 fauo xoja xeyoto nari: fono yuyeuo tagzunureba, caga

2 ca xite xõtat furuua tçurenofõ nari: nanzo morõuo

18 ca nari. Yotte migumo xiguanno atedocoroni võpi, xi
 19 no macini xitagatte, azaqeriuo banminno xitõni vqẽ
 20 cotõuo cayerimizu, conõ monogatariuo chicarano
 21 vnyobu tocorouafõnjonõ cotobauo tagayezu xoja xi,
 22 naxigaqi to naxitaru mono nari: Fuxite cõ, tacuga
 23 no cunxi coreuo yonde, jõ fucõ xite faino majicaqi
 24 uo chõrõ furu cotõ nacare. Toqini goxuxxc. 1592.
 25 Dezembro . 10 .

26 Fucan Fabian tçuxxinde xofu.



『天草版平家物語 語彙用例総索引』(1)近藤政美 / 池村奈代美 / 濱千代いづみ共編、影印・翻字篇 (勉誠出版) より

第二章 原拠本研究史の概観

(一) はじめに

『平家物語』にはきわめて多くの異本が存する。現存のものだけでも古写本・古版本を合せて200種くらいはある(『国書総目録』(岩波:昭52)など参考)。〈天草版平家〉がそのうちのどの系統の本を原拠にして口語訳されたのか。その本文の一部を日本に紹介した新村出博士をはじめ、諸学者に関心が持たれ、今日に至るまで調査・研究が続けられてきた。今、この書の口語訳の原拠にされた『平家物語』(原拠本)の研究の道程をふりかえり、これからの進めるべき方向を考える手がかりにしたい。

原拠本の研究は最近では山下宏明氏の『平家物語研究序説』(山下:昭47)、『平家物語の生成』(山下:昭59)等により『平家物語』諸本の研究が進められるのに続いて歩み、関係の深い『平家物語』の古写本が出現すると、飛躍的に進展した。これを四期に分けて整理し、現在における私の見解を述べたい。

(二) 第一期 模索期(明治20年～昭和20年)

新村出博士による〈天草版平家〉の紹介と研究、一部の漢字平がな交り文への翻字などの先駆的業績(新村:明42)がある。

- 1 本文は流布本と合するところが多い。同一源に出たものか。
- 2 流布本とは篇目の順序が異なる。口訳者の所為か。

続いて山田孝雄博士も『平家物語考』(山田:明44)に見解を示した。

- 1 組織からいうと、八坂本の系統である。
- 2 一方本の系統で灌頂の巻にあるべき章段が巻Ⅳに分けて上げられ、平家断絶の事で終わっている。この点では百二十句本に酷似する。

明治の末期における両博士の研究は資料の入手も難しく、調査も不十分で、異なる視点からの考察のため、相違する系統を推測することになる。

ローマ字で綴られた〈天草版平家〉を漢字平がな交り文に翻字する作業は、亀井高孝氏が引き継いで、雑誌「芸文」に連載(亀井:大15)、まとめて『天草本平家物語』(亀井:昭2)として刊行された。『平家物語』諸本との本文の比較が容易になる。

土井忠生博士は『近古の国語』で〈天草版平家〉の本文を百二十句本(〈京都本〉など)と対比して、見解を述べた(土井:昭9)。

- 1 巻Ⅱ第2章以降は百二十句本に基づく。
- 2 巻Ⅱ第1章(祇王)はよく照応せず、流布本系統に近いものに基づく。

(ここに至って、新村博士が『平家物語』と校合したのが巻Ⅰを主とする範囲であったと推測される。)

後に高橋貞一博士は『平家物語諸本の研究』(高橋：昭18)で次のように推測した。

- 1 『平家物語』の巻一より巻六に相当する部分は、流布本より先出のもの。
- 2 一方流の詞章を参照したかもしれないが、百二十句本に近いものを原拠にした。

この時期には、『平家物語』諸本の系統を解明しようとする研究が山田・高橋の両博士によって大きく進められる。そのため、〈天草版平家〉の口語訳の原拠はどのような本文の『平家物語』であったかというより、〈天草版平家〉は『平家物語』のどの系統に属するかという視点からの見解が多い。そういう中で、原拠本が二つの系統にわたるという土井博士の指摘は注目しておかなければならない。

(三) 第二期 二系統の論の展開期 (昭和21年～昭和40年)

この期には現存の『平家物語』諸本との本文の比較による原拠本の探究が続けられる。

原田福次氏が巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章の原拠本について『平家物語』諸本の本文との対比をした(原田：昭38・6)。そして、両者とも〈西教寺本〉〈竜門文庫本〉の系統本に葉子本以降の詞章が混入したものであると結論づけた。又、清瀬良一氏は原拠本の問題を〈天草版平家〉全般にわたって取り上げられた(清瀬：昭39・3)ほか。が、研究を続けられて、次期の『天草版平家物語の基礎的研究』(清瀬：昭57)でまとめられた。これらによって、巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章は覚一本系の『平家物語』が原拠本の骨子になっていることがほぼ明らかになった。なお、『平家物語』の巻八に相当する部分について、大系本(底本は〈竜大本〉)の詞章が混入しているという記述はともかく、前後と異質であることに気づかれているのは前期の(高橋：昭18)と合せて注意される。

風間力三氏は巻一～巻三に相当する部分を調査した(風間：昭40・11)が、推測されたことは先行の(原田：昭38・6)と同じ。

麻生朝道氏は『平家物語』の〈小城本〉を調査した。巻Ⅱ第2章より巻Ⅲまで(『平家物語』の巻四～巻八)は(麻生：昭40・3)、続いて、巻Ⅳの第16章から第20章まで(『平家物語』の巻十一に相当)は(麻生：昭42・3)に報告。しかし、翌年には原拠本にきわめて近い〈斯道本〉の紹介があり(亀井・阪田：昭41)、やがてその影印本『百二十句本平家物語』(汲古：昭45)も刊行されたため、ともにその後かえりみられることがなかった。

この期には、『平家物語』の諸本研究を土台にして、前期より多くの諸本が〈天草版平家〉との本文の対比に用いられた。又、原拠本を探究する視点も、口語訳の原拠になっ

た『平家物語』の本文が、現存諸本から考えてどのように位置づけられるかという方向に移って来た。また資料として扱ったものの中に校定本やその校異が多く含まれているのは残念なことである。

(四) 第三期 二系統・一補足の説の成立期(昭和41年～昭和60年)

『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』は『天草本平家物語』(亀井：昭2)の改訂版である。が、新たに「札記」を添え、「原本の本文批判に関するもの一斑」として、〈天草版平家〉と系統の上で深い関係にある百二十句本系を中心とする『平家物語』との本文の対比をした結果を報告している。用いた諸本は次の通りである。

(百二十句本系) 〈斯道本〉〈鍋島本〉など 6本

(参考) 〈平松本〉など 4本

そして、〈天草版平家〉は〈斯道本〉に対していちじるしく他をしのいで近い関係に立つと判断し、有力な目じるしとして、a. 物語の展開の仕方(順序など)、b. 人名に関する誤り、c. 原文をそのまま引用したと思われる重衡の東下りの条、などをあげている。

続いて、〈斯道本〉の影印『百二十句本平家物語』(汲古：昭45)が刊行された。そして、その後の巻Ⅱ第2章以降の原拠本の探究はこれを中心にして展開されることになった。

鎌田広夫氏は〈天草版平家〉の巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章(祇王)と現存の『平家物語』諸本と本文の対比を行い、原拠本の位置づけを試みた(鎌田：昭54・9)。そして、原拠本は〈西教寺本〉と流布本との中間の位置にある、葉子本と並ぶ、もう一つの性格をもった『平家物語』であると推測した。巻Ⅰと巻Ⅱ第1章との区別をすることなく、同じ本を原拠にして論じている。調査の結果は(原田：昭38・6)とほぼ同じである。

清瀬氏の『天草版平家物語の基礎的研究』(清瀬：昭57)は二部構成になっていて、その第一部に氏の原拠本に関する全研究がまとめられている。

巻Ⅰの原拠本は〈竜大本〉の類の本文を基軸にして、巻Ⅱ第1章は〈西教寺本〉の本文を基軸にして、覚一本や葉子本以下の一方系本の本文に基づく校異語句の書き込まれた、総合的な書き入れ校合本と考定した。百二十句本の影響を考えた点を除けば、指すところは(原田：昭38・6)と同じである。

第二章では『平家物語』の百二十句本と原拠本との関係について述べている。巻Ⅱ第2章以降の原拠本はその後〈斯道本〉が出現したので、これを中心にして考察を進め、調査を積み重ねて、この章に至っている。本文の対比には、山下宏明氏の「平家物語百

二十句本再考」(山下：昭43)を参考にして(百二十句本系)の〈斯道本〉〈小城本〉や(周辺諸本)の〈平松本〉〈竜大本〉などの諸本を用いている。

第三章では『平家物語』の巻八に相当する部分の原拠本について論じている。〈斯道本〉は巻八を欠く。渥美かをる氏の『平家物語の基礎的研究』(渥美：昭37)を参考にして〈竹柏園本〉〈平松本〉を中心にして〈鎌倉本〉〈屋代本〉・覚一本との本文の対比を試みている。その結果、この部分の原拠本の本文は、〈平松本〉的性格の本文に〈竹柏園本〉の類の本文が大幅に加わって形成されたと推測している。

この書は〈天草版平家〉の原拠本について、全体を有機的にとらえていて、この期においてはもっとも進んだものである。

鎌田広夫氏は『平家物語』の〈久原本〉(〈佐賀本〉とも)が出現したのを機に、これが〈斯道本〉の巻八の欠巻を補うことができるものかどうかについて考察された(鎌田：昭59)。「久原本」は他の平がな百二十句本よりも〈天草版平家〉によく照応する部分をもつが、〈斯道本〉巻八の欠巻を補うものとしては〈平松本〉や〈竹柏園本〉を越えない。清瀬説を側面から補強するにすぎない。

遠藤潤一氏は巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章の原拠本の本文について(清瀬：昭57)に焦点を合わせながら考察された(遠藤：昭60・3)。そして後者については、口語訳に際して語句の面で〈鍋島本〉などの平がな百二十句本の類の影響が生じたとされた。が、資料の再調査が必要である(近藤：昭61・7)。

この期における原拠本の研究は、清瀬氏を中心にして進められてきた観がある。が、問題もある。

巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章については、前期に(原田：昭38・6)がその性格を「〈西教寺本〉と〈竜門文庫本〉の系統本に葉子本以降の詞章が混入したもの」とし、又、この期に(鎌田：昭54・9)が「〈西教寺本〉と流布本の中間の位置にある、葉子本と並ぶ、もう一つの性格を持った『平家物語』」と位置づけている。別々の調査により結果を報告しているが、共に一本と考えている。これに対して、(清瀬：昭57)では巻Ⅰが「〈竜大本〉の類の本文に…」、巻Ⅱ第1章が「〈西教寺本〉の本文を基軸にして…」と、二本を考えている。現存の『平家物語』諸本からでは、この点を明確にできないであろうか。又、八坂流甲類本に関しては、清瀬氏は巻Ⅱ第1章に、遠藤氏は巻Ⅰにもそれぞれ平がな百二十句本の語句の影響があると主張するが、もっと精密な検証が必要である。

巻Ⅱ第2章以降については、前期に清瀬氏と麻生氏が異なる立場から現存の百二十句本より前出の漢字を多く用いたのものであると推測した。これは〈斯道本〉の出現により確認された。そして、清瀬氏が原拠本は〈斯道本〉の第二次本文と同一のものであると

結論づけている。この検証も必要であろう。

又、巻八に相当する部分については、清瀬氏が前期に〈竹柏園本〉に近いとされたが、(清瀬：昭57)で、「〈平松本〉的性格の本文に〈竹柏園本〉の類の本文が大幅に加わって形成されたもの」と改められた。これでこの部分の原拠本が前後の部分と異なることが明確になった。が、それをどう解釈するかはさらに考究が必要である。

(五) 第四期 検証期 (昭和61年～現代)

私は、〈天草版平家〉巻Ⅰの問題語句を『平家物語』の古写・古刊の100本余りの該当箇所と校合し、清瀬説((清瀬：昭57)など)に対して疑問を提出し、新しい見解を示した(近藤：昭61・7)。その概要を述べよう。

- 1 〈天草版平家〉の語句の中で現存の一方流諸本の該当する箇所によく照応するものを見つけることができない場合、それらは百二十句本系の諸本、特に〈斯道本〉などに多く見られる。このことから、それは巻Ⅱ第2章以降の原拠にした漢字片かな交りの百二十句本の巻Ⅰに相当する部分が本文の形成に関与しているからであろうと推測した。

〈天草版平家〉の巻Ⅱ第1章(祇王)の原拠本については、清瀬氏が覚一本系の〈西教寺本〉を基軸にして本文が形成されたと想定し、それには〈鍋島本〉のような平が百二十句本の本文の関与があったと考えた(清瀬：昭57など)。これに対して、私は(清瀬：昭57)にあげた〈鍋島本〉の用例を検討し、それらが氏の主張の論拠となり得ていないことを指摘し、さらにこの章全体にわたって『平家物語』諸本と本文を比較検討して、次のような見解を示した(近藤：昭61)。

- 2 百二十句本系の中でも漢字片かな交りの〈斯道本〉にきわめて近く、〈小城本〉にも近い『平家物語』が原拠本の本文の形成に関与している。それは巻Ⅱ第2章以降の原拠本として用いたものと同一の『平家物語』のこの章に相当する部分であろう。

私の上記の二編は、原拠本が覚一本系を主軸としている範囲について、八坂流甲類本の本文の関与の有無およびその性格について論じたものである。

(近藤：昭62・2)は(遠藤：昭60・3)の〈天草版平家〉巻Ⅰ・巻Ⅱ第1章の原拠本の本文の形成に一方流以外の諸本の関与についての見解を批判したものである。

(遠藤：昭60・3)は、(清瀬：昭57)の取り上げた問題語句について、一方流諸本の再点検をせず、自らの八坂流甲類本の調査を加えて論じている。(清瀬：昭57)の一方流諸本についての調査は不十分である。八坂流甲類本の調査にも、原本・写真・影印本によらず、底本を改変したテキストやそこに記載された校異などによっている。これらを

	〈天草版平家〉巻Ⅰ	〈天草版平家〉巻Ⅱ第Ⅰ章
清瀬	百二十句本の関与はない。	〈鍋島本〉などの平がな百二十句本
遠藤	〈鍋島本〉などの平がな百二十句本が関与	同上
近藤	〈斯道本〉に近い漢字片かな交じりの百二十句本が関与	〈斯道本〉に近い漢字片かな交じりの百二十句本が関与

取り上げた遠藤氏の用例の中には、論拠例として不適切なものが混入している。それらを論拠にした見解は肯定することができない。その後、遠藤氏には次の論考が発表された（遠藤：昭62・12）。

（六）補記

その後の私の〈天草版平家〉に関する次の論考がある。

- (i) 天草版平家物語の原拠本について——巻Ⅱ第2章から巻Ⅲ第8章までと、巻Ⅳ第2章から第28章までの範囲——（近藤：平2・12）

〈天草版平家〉の(ロ)の範囲の原拠本に関して、清瀬氏が〈斯道本〉の二次本文と同文だとする見解を批判した（第四章〔Ⅱ〕参照）。

- (ii) 天草版平家物語の原拠本について——巻Ⅲ第9章から巻Ⅳ第1章まで——（近藤：平4・2）

〈天草版平家〉の(イ)の範囲の原拠本に関して、現存の『平家物語』諸本の中では比較的よく照応するのは八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉である。短い語句は一方流諸本や百二十句本系諸本にも照合するものが存する（『天草版平家物語の原拠本および語彙・語法の研究』（近藤：平20）参考）。

又、鎌田広夫氏は『天草版平家物語の語法の研究』（鎌田：平10）で、〈天草版平家〉の編者が3人いて不干ハビヤンは有力な編者として各編を監修したという、編者複数説を主張した。しかし、福島邦道氏は『天草版平家物語叢録』（福島：平15）で批判的である。私も鎌田氏の編者複数説には同感できない。

〈追記〉小林千草氏は『日本語の研究』第5巻4号（小林：平21・10）の近藤著の書評の中で、「『天草版平家物語』には、一貫したまなざしが注がれていることを検証する過程において、やはり不干ハビヤンの統一した編集の眼と手を主張しておきたいと思う」と述べている。

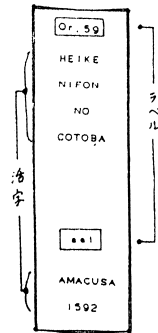
資料② 天草版『平家物語』の背表紙の書名の謎 — NIFONNO/COTOBATO/TONG. —

昭和62年の夏、私は『天草版平家物語 語彙用例総索引』作成のため、日本にもたらされた写真版の『天草版平家物語』(勉誠社文庫⑦⑧)の不鮮明な約500箇所を原本と照合する目的で大英図書館(大英博物館から独立)を訪れた。調査結果は同総索引の(1)影印・翻字篇の「天草版平家物語の翻字 注記」(835頁〜855頁)で報告した。その時のメモによれば、本書の背表紙は上方に書名がある。これは内表紙(扉)に拠っている。ところが、「平家」が背表紙に「HEIKE」、内表紙に「FEIQE」とあるのは異様である。室町時代のキリシタンの綴り方では内表紙のようになる。ポルトガル語式の写音法によったので、決して背表紙のようにはならなかった。

土井忠生氏が昭和3年に大英博物館でこの書を閲覧していた時、表紙が破損して製本に回したという(『吉利支丹文献考』(三省堂:昭38)参考)。この時、現在の表紙に取り換えられたのであろう。大正10年頃にこの書の写真フィルムが日本に将来され、東洋文庫に所蔵されている。そして、亀井高孝翻字『天草本平家物語』(亀井:昭2)に表紙の写真が掲載されている。背表紙の書名はN IFONNO/COTOBATO/TONG. と判読できる。私にはTONG.の意味が長年の疑問、謎であった。

8月4日、大英図書館の研究室で原本の内表紙の左の頁(白紙13枚中の終りの頁)に下のようなメモがあるのを発見した。隣席にいた老碩学に尋ねたところ、トンキン(TONQUIN: ベトナムの北方地方)の言葉で書かれた物語だという。私は背表紙のTONG.はTONQUINの略だと感知した。おそらく大英博物館へ入る過程で係員が誤記したものであろう。そして、鉛筆で書かれたメモはTONQUINがJAPANの誤りであることに気づいたことを示している。こうして、現在の表紙に改装する際に内表紙の語句を参考にして、「HEIKE/N IFONNO/COTOBATA」と改名した。昭和初期のことである。以上が私の見解である。(『解釈学』第11輯(平成6年刊)掲載論文の要約)

(ペンで)
Fables in the Language
of Tonquin
 (鉛筆で)
 Or 59, a. 1. Heike
 K
 C. 24, e 4
 Sn 59c 6
 (隣席の老碩学の
 説明の際の筆跡)
 X^e Tonquin: Tonkin, Indo China, Vietnam
 Sed



第三章 原拠本の本文の検証〔I〕〈早大本〉

(一) はじめに

〈天草版平家〉の原拠本が、多くの『平家物語』の異本の中でどの本にあたるのか、まだ特定できない状態である。そのため、〈天草版平家〉の語句・語法や表現と原拠本との関係でしばしば問題が起る。次の文章の下線部の語句もその一つである。

例(平重盛が父の清盛に) …: こと新しうござれども、重盛かの成親^{なり}の妹に相具し子にてござる: 維盛^{つとむ}はまた婿となつてござる。その縁に引かれてかう申すとおほしめさるるか? 全くその儀ではござない。世のため、家のため、国のため、君のためのことを存じて申す: むさと人を死罪に行なへば、世も乱れ、また身の上に報ふと見えてござれば、恐ろしい儀ぢや。(巻I第4章32-8、『平家物語』の対応箇所: 巻二「小教訓」)

上の下線の語句については、はじめに風間力三氏が「天草本平家物語の口訳原典(上)」(風間: 昭40・11)の中で、〈天草版平家〉の本文が特異で『平家物語』のどの本とも対応しない例の1つとしてあげた。その後は清瀬良一氏が『天草版平家物語の基礎的研究』(清瀬: 昭57)において、覚一本系の〈陽明本〉との関連において取りあげた。〈陽明本〉は4つの語句が存するけれども順序が異なり、「世のため、国のため、君のため、家のため」となっている。

これらに対して、私は多くの『平家物語』諸本を調査し、〈天草版平家〉と4つの語句およびその順序が同じ1本を葉子本系の中に発見したことを報告する。続いて、この1本〈早大本〉に従来他の諸本の中では容易に見つけることができなかった〈天草版平家〉の語句の原拠と考えられるものの存する例をあげ、これが偶然の一致でないことを推測する。

(二) 『平家物語』諸本における対応語句とその順序

〈天草版平家〉の4つの語句は『平家物語』諸本でどうなっているか。100本余りの古写本・古刊本を調査し、主要なものを「世・家・国・君」などと略して示す。また(覚4)などはこの稿を作成した時の整理番号である。詳細は(近藤: 平20)参照。

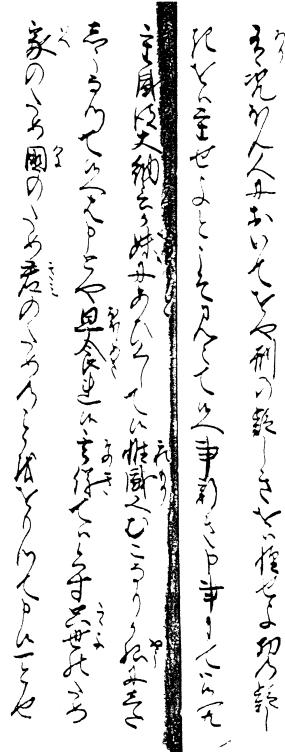
- ・覚一本系 △ (覚4) 世・国・君・家 (陽明本) (清瀬氏が取りあげた)
- ・葉子本系 ● (葉2) 世・家・国・君 (早大本) (この報告で取りあげる)
- ・下村本系 ▲ (下2) 世・家・君・国 (東大国文本9) (康豊本) など
- ・流布本系 ▲ (流1) 君・国・世・家 (学習院本4) (駒大本27) など

- ・平曲諸本 ▲（平2）君・国・世・家『波多野流譜本』（東大本）など
- ・百二十句本系・八坂系・増補系は省略。

風間氏は前記の論考で『平家物語』10本余（大部分が翻刻本）を調査して、上記のうち（流1）など7種をあげ、「天草口訳と同じものは無いが、この様なものは、翻訳の心理を考えれば、そんなに意味のあることではない」という見解を示した。又、清瀬氏は前記の著書で『平家物語』20本余を調査して8種をあげ、〈天草版平家〉の4つの語句については、「陽明本の本文と関係がある」と述べている。

〈天草版平家〉の序に示された「この物語を力の及ぶところは本書の言葉^{なが}を違^{しまじや}へず書写し」という口語訳の指針、および原拠本に近い『平家物語』諸本との校合による口語訳の実際から推測するならば、この部分の原拠は〈天草版平家〉と同じ語句が同じ順序に並んでいたと考えられる。私はこれまで調査・探求して歩いた末に〈天草版平家〉と同じくする1本を早稲田大学付属図書館で発見した（昭60.7.1.〈早大本〉）。

資料③ 『平家物語』（早大本）の4語句（世・家・国・君）『平家物語』巻二 早稲田大学付属図書館蔵、山下宏明著『平家物語の生成』によれば、葉子本系で室町時代中期の本文。図書番号リ5/6170/2。



(三) 〈早大本〉の該当語句と原拠との関連

『平家物語』諸本の中から8本を取り上げ、その中から重要と思われる4本(印を付す)を選び、それらの問題の語句を含む文と比較してみる。但し、便宜上(a) (b) (c) (d)の4つの部分に区切り、問題の語句で〈天草版平家〉にあるものはその順序にしたがってABCDの文字を用いて示す。

○(a)の部分について

〈天草版平家〉には副詞「ただ」がない。この点で一致するのは〈竜大本〉(覚1)と〈陽明本〉(覚4)である。〈駒大本29〉(葉1)以下には「ただ」が添加されて(c)の対象を限定している。

○(b)の部分について

〈早大本〉(葉2)は4つの語句とその順序、それに続く「のことを」までのすべてにわたって〈天草版平家〉と一致する。〈竜大本〉(覚1)から〈学習院本4〉(流1)に至るまでの他の諸本は「のこと」が一致するが、4つの語句とその順序のいずれかが相違する。〈斯道本〉(百1)〈平松本〉(八1)は二つの語句から成り、「のこと」に相当する語を欠く。

○(c)の部分について

〈天草版平家〉の「存じて」は〈斯道本〉(百1)〈平松本〉(八1)と一致する。〈鍋島本〉などの平仮名百二十句本も同じ語句である。〈竜大本〉(覚1)〈早大本〉(葉2)〈駒大本29〉(葉1)〈学習院本4〉(流1)〈陽明本〉(覚4)などは意味の上で照応する。

表1 〈天草版平家〉A世のため、B家のため、C国のため、D君のため

	(a)	(b)	(c)	(d)
〈天草版平家〉		A、B、C、Dのことを	存じて	申す。
竜大本〈覚1〉		A、D、Bの事	をもて	申候。
△陽明本〈覚4〉		A、C、D、Bの事を	思ひて	申候。
駒大本29〈葉1〉	たゞ	A、B、Dの事を	おもふて	申候。
●早大本〈葉2〉	たゞ	A、B、C、Dのことを	をもつて	申候。
▲東大国文本9〈下2〉	只	A、B、D、Cの事を	思て	申候。
▲学習院本4〈流1〉	たゞ	D、C、A、Bの事を	おもつて	申候。
斯道本〈百1〉	只	A、(人ノ為)ヲ	存*(して)	カヤウニ申候フ也。
平松本〈八1〉	只	A、Bヲ	存テ	加様 _ニ 申候也。

備考 〈斯道本〉の*(して)は、原本では古体字で記されている。

○(d)の部分について

〈天草版平家〉の「申す」は〈竜大本〉(覚1)から〈学習院本4〉(流1)までの諸本の「申候」と照応すると言えよう。原拠に「候」がありながら口語訳にあたって訳出されていないと考えられる例は多く見られるからである。〈斯道本〉(百1)の「カヤウニ申候フ也」などはよく照応するとは言えない。

次に、〈天草版平家〉のこの文の原拠を『平家物語』諸本から推測すると、次のようになっていたと思われる。なお、括弧に示したのは、各部分の推測の主たる根拠とした本である。

表2 〈天草版平家〉の本文の原拠の『平家物語』(推測)

(a)	(b)	(c)	(d)
(ナシ) 〈竜大本〉	世のため、家のため、国のため、君のためのことを (早大本)	存じて (斯道本)	申候。 (竜大本)

このように見てくると、〈早大本〉は(b)の部分が〈天草版平家〉と一致する注目すべき本文を有することになる。が、(a)と(c)の部分が照応しない。したがって、原拠本そのものとは考えられないし、この文に限ってもそれと同じではない。

続いて、上のように推量した原拠の文の形成について考えてみたい。〈天草版平家〉の原拠本の本文の形成には〈竜大本〉に近い覚一本系の本が主軸となっている。(a)および(d)の部分はこれによっているものと思われる。

(c)の部分については、原拠として二つの語句が考えられる。

- 1、存じて…〈斯道本〉などから。
- 2、思ひて…〈陽明本〉などから。

原拠本の本文の形成には〈斯道本〉にきわめて近い百二十句本系の本が関与したものと考えられ、原拠が1(存じて)とあって、〈天草版平家〉はこれを踏襲したと解するのが妥当であると思われる。が、〈天草版平家〉では「思ふ」意を表現する場合、自己の動作には「存ず」を用いることが多い。又、九州に伝えられた一方流の『平家物語』の中にも〈東大国文本9〉など「思ふ」が用いられている本もある。これらのことから、2(思ひて)を原拠として全く否定してしまうこともできない。

(b)の部分は、〈天草版平家〉が口語訳の際に原拠を踏襲したと考えるのが妥当であろう。そして、それは〈早大本〉の語句と一致する。原拠の語句と〈早大本〉の語句との関係については、二つの場合が考えられる。

- (i)『平家物語』諸本が生成発展する過程において、別々に形成されたものが偶然一致

した。

- (ii) 原拠本の本文が形成される過程において、〈早大本〉の類（4つの語句とその順序が〈天草版平家〉と同じ本）の1本が校合のような方法で関与した。

上のうちのどちらであったかを決定するのは困難である。というのは、現在、次のような状況になっているからである。

- (1) 原拠本の存在が確認されていないため、〈天草版平家〉および現存する『平家物語』諸本を校合して原拠の語句を推定するという方法をとらざるを得ない。
- (2) 〈早大本〉の類と称しても、そのような一群を推測するのみであって、見る事ができるのは〈早大本〉1本である。

そこで、(i) (ii)のどちらかに決定するというより、どちらの可能性が大きいかを考えることにする。その方法として、〈天草版平家〉と『平家物語』諸本とを校合し、原拠と推定される語句などを諸先学の見出せなかった、又は見出してもその関係を明確にできなかったものが、〈早大本〉とよく照応する例について検討してみたい。このような例が他になれば(i)の場合の可能性が大きいし、多ければ多いほど(ii)の場合の可能性が大きくなると考えるからである。

(四) 〈早大本〉と照応する他の問題語句

〈天草版平家〉の語句や表現で原拠本によっていと考えられる部分については、諸先学によって調査された『平家物語』諸本の中に大抵照応するものが存する。が、少数それらの中に見出せなかったものや、原拠との関係の不明確なものもある。それらのうち、問題の「世のため、家のため、国のため、君のため」のように、〈早大本〉の中に発見することができた2例をあげて説明する。

- (1) (平教盛が兄の清盛に従者季貞を通して) まことに本意なさうに重ねて申さるるは：保元平治よりこのかた度々の合戦にも(a)先づ(b)おん命に代りませうずるところ(c)存じたれ、…と、言はれたれば：(巻I第5章39-8、『平家物語』の対応箇所：卷二「少将乞請」)

清瀬氏は「一方系本の本文変化の類型としては、波多野本の本文が下村本や流布本の本文を踏襲せず、波多野本において独自にその本文を動かした箇所のあることを示すケース」として4例をあげられた。〈天草版平家〉のこの例に対応する部分も、その一つである。

- 〈波多野流譜本〉〈平3〉(a)先まつさきに(b)命を奉らふどころ(c)存じ、か。

氏は、〈天草版平家〉の「先づ」が〈波多野流譜本〉の「先」と関係があるのではある

まいか、と（清瀬：昭57）の53頁で述べている。が、偶々「先」の文字が用いられているものの、他の部分を比較すれば、両者の深い関連を示すことは不可能である。

私の調査では、この語を〈早大本〉〈太山寺本〉に見出すことができた。これによって、一方流の一群の諸本にその存在が推測されよう。又、清瀬氏の見解にも再考を迫ることになろう。

表3 〈天草版平家〉(a)先づ(b)おん命に代りませうずるとこそ…

	(a)	(b)	(c)
〈天草版平家〉	先づ	おん命に代りませうずるとこそ	存じたれ。
竜大本〈覚1〉		御命にかはりまいらせむとこそ	存候へ。
駒大本25〈覚2〉		御いのちにかはりまいらせんとこそ	ぞんじ候しか。
△陽明本〈覚4〉		御命にかはりまいらせんとこそ	存候へ。
駒大本29〈葉1〉		御いのちにはかはりまいらせんとこそ	ぞんじ候しか。
●早大本〈葉2〉	先 ^{まつ}	御命にかはりまいらせんとこそ	存候しか。
静嘉堂片仮名本 〈下3〉		御ん命ニハ代り参ラセントコソ	存候シカ。
学習院本4〈流1〉		御いのちにはかはりまいらせんとこそ	存候しか。
斯道本〈百1〉		御命ニモ替奉り、	
平松本〈八1〉		御命ニ替奉り、	

(2) (a)経遠帰ってこの由を申したれば；(b)成親脚涙をはらはらと流いて、(c)さりともわが世にあった程は、従ひ付いた者ども一二千人もあらうずるに、今はよそながらもこのありさまを見送る者のないことの悲しさよとて、泣かれたれば：(巻I第7章54-15、『平家物語』の対応箇所：巻二、大納言流罪)

表4 〈天草版平家〉(a)経遠帰ってこの由を申したれば：

	(a)	(b)	(c)
〈天草版平家〉	経遠帰ってこの由を申したれば：	成親脚涙をはらはらと流いて	さりとも
竜大本〈覚1〉			
△陽明本〈覚4〉	経遠かへり参て此由かくと申ければ	大納言涙をはらゝとなかひて	さり共
駒大本29〈葉1〉			さりとも
●早大本〈葉2〉	経遠かへり参て此由かくと申ければ	大納言殿涙をはらゝとなかひて	さりとも

▲東大国文本9 〈下2〉		大納言涙をはらゝゝとなかひて	さり共
学習院本3〈下3〉	その時	大納言なみたをはらゝゝとなかひて	さりとも
▲駒大本27〈流1〉	その時	大納言なみたをはらゝゝとなかひて	さりとも
斯道本〈百1〉			

備考 「ゝゝ」は2文字分のおどり字を示す。

〈天草版平家〉の(a)「経遠…」は、〈竜大本〉などの原拠本に近い諸本や原拠本の本文の形成に関与していると推測される百二十句本系の諸本に対応語句が見られない。清瀬氏が〈陽明本〉の中に照応する語句を発見した。〈陽明本〉は(b)の部分が照応し、(c)の部分も一致するが、これに続く「わが世に…」がよく照応しない。

これに対して、〈早大本〉は(a)の部分が〈陽明本〉と同じ、(b)の部分も「大納言」に「殿」が添えられているという相違のみ、(c)「さりとも」は〈天草版平家〉と一致し、「わが世に…」もよく照応する。〈陽明本〉より原拠本に近いと言えよう。補遺→62頁

他に次の4例が(近藤：平20)に上げてある。

- (3) ある時に^{ひやうらん}兵乱が起って、所々に(a)^ひ火をあげたれば、…。(巻I第6章51-11、『平家物語』の対応箇所：巻二、烽火之沙汰)

表5 〈天草版平家〉(a)^ひ火をあげたれば、

〈天草版平家〉	^ひ 火
●早大本〈葉2〉	^ひ 火
△陽明本〈覚4〉・竜大本〈覚1〉・加賀本〈下1〉・筑大本12〈下3〉・斯道本〈百1〉	烽火
駒大本29〈葉1〉	ほうくわ
国会本〈流2〉	^{ほう} 烽火

- (4) 漸^{やうや}うとして雲林院といふ所へ落ちていて、(少納言の北の方・若君がたを)そのあたりの寺に^{おろ}下し置いて、送りの者どもも皆(a)わが身の捨てがたさに^{いとま}暇を乞うて帰れば：(巻I第4章34-5、『平家物語』の対応箇所：巻二、小教訓)

表6 〈天草版平家〉(a)わが身の捨てがたさに…：

〈天草版平家〉	わが身
●早大本〈葉2〉	我身 <small>わかみ</small>
▲東大国文本9〈下2〉	我身
竜大本〈覚1〉・学習院本3〈下3〉・駒大本27〈流1〉	身々
田安本〈覚1〉	身 <small>み</small>
駒大本29〈葉1〉	み
斯道本〈百1〉	身

- (5) (俊寛が有王に) …明けても、暮れても都のことのいだみ(a)思ひ出され、ゆかしい者どもが面影を夢に見る折りもあり、幻に立つ時もあり：…と悲しまるれば：(巻I第12章87-1、『平家物語』の対応箇所：巻三、有王)

表7 〈天草版平家〉都のことのいだみ(a)思ひ出され、

〈天草版平家〉	思ひ 出 <small>いだ</small> され、
●早大本〈葉2〉	おもひ出せは、
竜大本〈覚1〉	思ひ 居たれは、
田安本〈覚1〉駒大本29〈葉1〉	おもひゐたれは、
加賀本〈下1〉	思 居 <small>き</small> たれは
筑大本12〈下3〉	思ヒ 居タレハ
国会本〈流2〉	思 ゐたれは、
斯道本〈百1〉	思 居タレハ

- (6) (平教盛が女婿の少将成経に) …それ故にかしばらく、宿所に置き奉れと、言はれたれども、始終(a)しかるべからうとも見えぬ。(巻I第5章40-17、『平家物語』の対応箇所：巻二、少将乞請)

表8 〈天草版平家〉(a)しかるべからうとも見えぬ。

〈天草版平家〉	しかるべからうとも、
●早大本〈葉2〉	よかるへしとも、(「し」を消し、その上に「よ」と記したように見える)
△陽明本〈覺1〉	よかるへしとも、
竜大本〈覺1〉	よかるへしとも、
駒大本29〈葉1〉	よかるべしとも、
加賀本〈下1〉	よかるへしとも、
筑大本12〈下3〉	ヨカルベシ共、
国会本〈流2〉	よかるへしとも、
斯道本〈百1〉	よかるへしとも、
東大図書館本〈未分類〉	たのもしかるへし共、
天理別本69〈未分類〉	たのもしかるへしとも、

以上、6例(後の4例は説明を略)をあげて〈天草版平家〉の原拠と〈早大本〉との関わりについて述べた。このような例が存するので、〈天草版平家〉の「世のため、…」という問題の語句の原拠と〈早大本〉の語句との一致は偶然のものとは考えがたい。おそらく原拠本の本文の形成される過程で、〈早大本〉の類の1本が校合のような方法で関与しているであろう。

(五) むすび

〈天草版平家〉の「世のため、家のため、国のため、君のため」の原拠については、『平家物語』諸本に4つの語句とその順序が一致するものを見つかることができなかつたため、諸先学によって問題にされ、いろいろと論じられてきた。が、今回、これが一致する本文をもつ『平家物語』として、葉子本系の〈早大本〉が存在することを報告した。

〈天草版平家〉の原拠に関して従来問題にされてきた語句と〈早大本〉の対応語句とを比較してみると、よく照応すると考えられる例がかなり存在する。それ故、「世のため、…」という原拠の語句と〈早大本〉の語句とが、『平家物語』諸本の生成発展する過程で別々に形成され、偶然に一致したものとは考えがたい。恐らく原拠の語句は〈早大本〉の類の1本が関与することによって成立したものであろう。

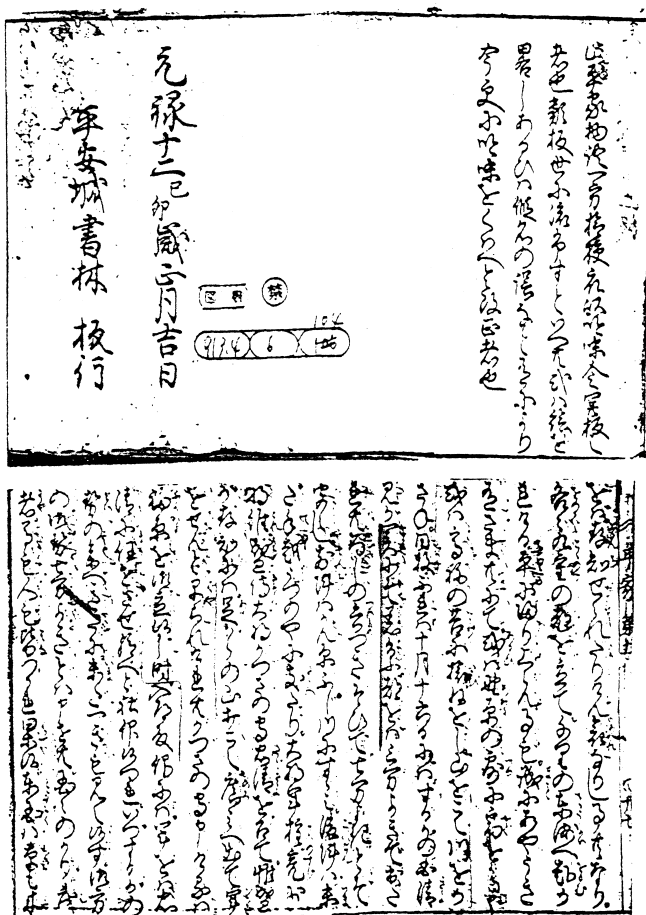
この調査報告によって、〈早大本〉のような本文を有する『平家物語』が存在しないことを前提にした風間氏の見解は否定されることになる。又、4つの語句が同じであるが順序の異なる本は多数存在する。そのうちの1本である〈陽明本〉を見出して関係を

求め、さらにそれを基にして〈陽明本〉の成立の時期や事情を論じた清瀬氏の見解には再考を要することになろう。

なお、考え方によっては現在の分類で葉子本系に入っている、もう一つの性格を有する『平家物語』とする鎌田説(鎌田：昭54)を補強することになろう。

追記 第五章の検証〔Ⅲ〕の「九月十三夜」の四首の歌の有無・順序が〈天草版平家〉と一致する〈竹柏園本〉の問題も関連があると思われる。

資料④ 『平家物語』元禄十二年刊本(愛知県立大学付属図書館蔵)より



第四章 原拠本の本文の検証〔Ⅱ〕〈斯道本〉

(一) はじめに

〈天草版平家〉の〔口〕の範囲(巻Ⅱ第2章～巻Ⅲ第8章、及び巻Ⅳ第2章～第28章)について、その本文を現存の『平家物語』の古写本・古刊本と比較してみると、原拠本は百二十句本系で漢字片かな交じりの〈斯道本〉に最も近いと判断できる。では、原拠本は〈斯道本〉そのものなのか。この問題を検証するために、次の3項を選んだ。

〈i〉巻Ⅳ第12章の「重衡の東下りのこと」の条において、喜一校が節ふしを付けて語るという趣向になっている部分。

〈ii〉〈斯道本〉の第二次本文が第一次本文と内容の上で重なる箇所のうち、〈天草版平家〉にも対応する文や語句の存する部分。

〈iii〉巻Ⅳ第2章以降(『平家物語』の巻九～巻十二)で、逐語訳の目立つ部分。

本章の検証〔Ⅱ〕では、上記の3項について、〈天草版平家〉の本文を『平家物語』諸本と対照して検討する。そして、原拠本が〈斯道本〉(第一次・第二次の両本文とも)そのものでないことを示し、さらに〈斯道本〉とどのような関係に立つものであるかを論じたい。

(二) 「重衡の東下りのこと」の条の冒頭の部分

〈天草版平家〉の中で、口訳者が原拠本の本文をそのまま引用しようと意図して綴った部分が、一箇所だけ存する。それは巻Ⅳ第12章の「重衡の東下りのこと」の条の冒頭にある。

右馬の允の「とてものことに重衡の東下りのことをもお語りあれ」という要請に対して、「ここはとっとおもしろいところでござるほどに、本々ほんほんに節ふしを付けて語りませう」という前置きをして、『平家物語』の巻十の「重衡の東下り」の章段を綴り始めている。

◆ 〈天草版平家〉と〈斯道本〉との対照

.....
〈天〉鎌倉(1)の前(2)の右兵衛(3)佐頼朝(4)しきりに申されければ、三位(4)中将重衡をば
〈斯〉鎌倉▼前▼右兵衛▼佐頼朝(4)頻ニ 申レケレハ、 三位▼中将重衡ヲハ

三月十三日(5)に関東へこそ下されけれ、梶原平三(6)▼ 土肥(7)の次郎が手より
三月十三日▼関東へこそ下サレケレ、梶原平三景時土肥▼次郎カ手ヨリ

受け取って、具し奉ってぞ下りける。…粟田口をうち過ぎて、⁽⁸⁾四の宮
請取テ、具シ奉テソ 下リケル。…粟田口ヲ打過テ、四▼宮

河原にもなりければ、ここは昔延喜▼第四の皇子蝉丸の関の嵐に心を澄まし、
河原ニモ成ケレハ、爰ハ昔シ延喜▼第四ノ皇子蝉丸ノ関ノ嵐ニ心ヲ澄シ、

琵琶を弾じ給ひしに、博雅⁽⁹⁾の三位夜もすがら雨の降る夜も、降らぬ夜も…、
琵琶ヲ弾シ玉ヒシニ、博雅▼三位終夜ヲ 雨ノ降ル夜モ、降ラヌ夜モ…、

志賀⁽¹⁰⁾の浦波春かけて、霞に曇る鏡山…荒れてなかなかやさしきは、
志賀▼浦波春カケテ、霞ニ陰ル鏡山…荒テ中々 艶キハ、

不破⁽¹¹⁾の関屋の板廂、いかに鳴海の潮干潟、涙に袖は絞⁽¹²⁾りつつ、かの在原の
不破▼関屋ノ板廂、イカニ鳴海ノ塩干方、涙ニ袖ハ絞^{シホシ}（菱（傍書））ツゝ、彼ノ在原ノ

⁽¹³⁾業平が唐衣着つつ慣れにしと詠じけん、三河⁽¹⁴⁾の国八橋にもなりしかば、
^{ナニカシ}何某 カ唐衣キツゝ馴ニシト 詠シケン、三河▼国八橋ニモ成シカハ、

蜘蛛手⁽¹⁵⁾に物をとあはれなり：浜名の橋をも過ぎければ、池田の宿にぞ着き給
蜘蛛手ニ物ヲト哀也、 浜名ノ橋ヲモ過ケレハ、池田▼宿ニソ着玉

ふ：か⁽¹⁶⁾の宿の遊君熊野がもとにぞ宿し給ふ。熊野は三位▼中将を
フ、彼▼宿ノ遊君湯屋カ許ニソ 宿シ玉フ。湯屋ハ三位▼中将ヲ

見たてまつって、…一首の歌をぞ奉る。旅⁽¹⁷⁾の空埴生⁽¹⁷⁾の小屋のいぶせさに、
見奉テ、 …一首ノ歌ヲソ奉ツル。旅ノ空土産▼小屋ノイフセサニ、

いかに故郷恋⁽¹⁸⁾しかるらん。三位⁽¹⁸⁾の中将の御返事に。故郷も恋しくもなし旅の
イカニ古郷恋シカルラン。三位▼中将ノ御返事ニ、古郷モ恋シクモナシ旅ノ

空、都も終⁽¹⁹⁾の住処ならねば。(298-7 ~ 299-19)

天、都も終⁽²⁰⁾ノスミカナラネハ。(583-9 ~ 585-3)

● [A] (斯道本) と相違する語句

〈天草版平家〉が〈斯道本〉と相違するのは、(5)三月十三日に、(6)梶原平三▼、(12)絞りつつ、(13)在原の業平、以上の4例である。これらについては〈小城本〉〈鍋島本〉などの諸本にも一致するものを見出し得ない。

ただし、(12)に対応する〈斯道本〉の語句は本行の「絞」に添えて、校異として左傍に「萎」、右傍に「シホレ」が記されている。本行の「絞」の文字を原拠にして、「しほり」と読んだと解することもできなくはない。なお、類似の対応を示す次の例を参考にすれば、「絞」は「洩」に起因するものであろう。

1 〈天〉よその袂も絞られた。(373-15)

〈斯〉絞^{シホ}リケリ。〈小〉絞^{シホ}リケリ。〈鍋〉しほりけり。

2 〈屋〉洩^{シホ}レケリ。(881-3) 洩^{シホ}ラセ坐ケリ。(874-6) (『屋代本平家物語』影印本(角川：昭53再))

(6) (13)は人物呼称の固有名詞である。〈天草版平家〉においては、これらを原拠の呼称にとられることなく簡略化・平明化している。

3 〈天〉梶原平三に仰せ付けられて、(361-12)

〈斯〉梶原平三景時、〈小〉同左、

4 〈天〉同じ二十四日に木曾殿と…、(251-7)

〈斯〉木曾ノ左馬頭、〈小〉木曾左馬頭、

(5)は日時を指定する格助詞「に」である。日付を示す語句の後に、〈天草版平家〉に付されているが、〈斯道本〉などには見られない。同様の例が他にも存するので、口語訳の際に付されることになったと解することもできる。

5 〈天〉去んぬる七日に…、(285-2)

〈斯〉去ル七日、〈小〉同左、〈鍋〉さんぬる七日、

6 〈天〉同じ十三日に…、(285-18)

〈斯〉同十三日、〈小〉同左、〈鍋〉おなしく十三日、

● [B] (斯道本) に記されていない助詞「の」

広い意味での助詞「の」は、〈天草版平家〉に用いられているのに〈斯道本〉に記されていない例が存する。

(1) (2) (3)鎌倉の前^{さき}の右兵衛の佐、(4)三位の中将、(7)土肥の次郎、(8)四の宮河原、(9)博雅の三位、(10)志賀の浦波、(11)不破の関屋、(14)三河の国、(15)池田の宿、(16)かの宿、(17)殖生の小屋、(18)三位の中将、以上の14例である。ただし、〈小城本〉では(10)は傍に、(17)は本

行に、「ノ」が記されている。

室町時代末期には、縦書きで上下の体言を漢字で表記する場合、この種の「ノ」を記さないことが多かった。が、読む場合にはこれを補うのが普通であった。これらと同じ系統で後出本とされる〈鍋島本〉には、平がなを主としているので、上の例については、(11)「ふはのせき屋」などとすべて「の」が記されている。

なお、〈天草版平家〉で「の」が期待される箇所に見われていない次の例は、上下の体言が漢字表記で「ノ」が記されていなかった原拠本の語句を、補って読まなかったためであろう。

7 〈天〉延喜▼第四の皇子 (298-17)

〈斯〉延喜▼第四ノ皇子、〈小〉同左、〈鍋〉えんぎのだい四のわうじ、

8 〈天〉三位▼中将

〈斯〉三位▼中将、〈小〉同左、〈鍋〉三みの中じやう、

〈天草版平家〉における助詞「の」のこれらの用例での現れ方は、原拠本が〈斯道本〉と同じ表記であったとしても矛盾はない。

〈天草版平家〉には、〈斯道本〉と対照すると、先の [A] [B] のような相違が認められる。この部分の本文が原拠の語句を一語一句そのまま踏襲して作成されたと仮定すれば、[A] の(5) (6) (13)の三例は〈斯道本〉の語句を原拠にしたと解することができず、〈斯道本〉の本文は原拠本と同文ではないということになる。

しかし、このことに関しては、次のようにも考えられよう。この部分は喜一検校が節を付けて語るところを写したという想定になっている。が、口訳者が実際に語るのを聞いて筆記したのではない。又、現存の百二十句本系の諸本から推測すれば、原拠本には曲譜が添えられていなかったであろう。しかも、この書の編纂方針として、日本語を学ぶキリシタンの宣教師たちに理解しやすくしようということが全体を貫いている。原拠本を一語一句そのまま写すという行為の中で、これと矛盾した編纂方針をも扱み入れて多少の操作をした、このように仮定すれば、原拠本の本文が〈斯道本〉と同文であったとしても、この部分については〈天草版平家〉のような本文が成立しうると推測される。

(三) 〈斯道本〉の第二次本文と対応する部分

〈斯道本〉は巻第五の四十七句に、「経正竹生鳥参詣」「新院巖島御幸願文」の2つの記事を増補し、その前後の部分をも記した3丁分〈第二次本文〉を添えている。第二次本文の2つの記事の前後の部分は、もとの本文〈第一次本文〉に対応する箇所を有し、

これらは各々が内容の上で重複する。又、その一部は〈天草版平家〉にも対応する文が存する。

● [A] 第一次・第二次の両本文の対応と語句の相違箇所

〈天草版平家〉が〈斯道本〉の第一次・第二次の両本文に対応箇所を有する部分を示そう。

◆ 2つの増補記事より前の部分、

〈天〉総別^{そうべつ}旨^{めい}を下^{くだ}されて戦場^{せんじょう}へ向^{むか}ふ大將^{だいじょう}は三^{さん}つのことを心得^{こころえ}られいではかなはぬ。それといふは、まづ参内^{さんない}して勅命^{ちくめい}を蒙^{かうむ}る時、家^{いへ}を忘^{わす}れることと、家^{いへ}を出^いづる時は妻子^{しよし}を忘^{わす}れること、戦場^{せんじょう}で敵^{てき}に会^あうては身^みを忘^{わす}れることとでござる。さだめてこのやうなことをば維盛^{いせい}もさこそ存^{ぞん}ぜられつらう：…山^{やま}を重^{おも}ね、水^{みづ}を隔^へて行^いかるるほどに、十月^{じふぐわつ}の十三日^{じふさんにち}には平家^{へいけ}は駿河^{しゆんが}の国^{くに}の清見^{せいけん}が関^{せき}へ着^きかれてござった。都^{みやこ}をば三万余^{さんよろい}騎^きで出^いられたれども、路次^{ろじ}の兵^{へい}どもが付^ついたによって、七万余^{しちよろい}りと聞^きえまらした。(148-5～22)

◆ 2つの増補記事より後の部分、

〈天〉先陣^{せんじん}はさうさうするうちに富士川^{ふじがわ}のあたりに着^きけば、…、大將^{だいじょう}維盛^{いせい}上総^{かづさ}の守^{まも}り召^{めい}して、維盛^{いせい}が存^{ぞん}ずるには、足柄^{あしから}をうち越^こえて、坂東^{ばんとう}で軍^{いくさ}をせうと思^{おも}ふと言^いはれたれば、上総^{かづさ}の守^{まも}りが申^{まを}したは：福原^{ふくはら}を立たせ(149-10～17)

この部分に対応する〈斯道本〉の第一次・第二次の両本文の語句の相違は4箇所ある。

	①	②	③	④
〈天草版平家〉	水	言はれたれば	上総の守	このやうなことをば
〈斯〉第一次本文	野	急レケレハ	上総介	カヤウノコトヲハ
〈斯〉第二次本文	水	云ワレケレハ	上総守	カヤウノコトヲモ

清瀬良一氏はそのうちの①②③の語句を取り上げ、第二次本文の方が〈天草版平家〉と一致、またはよく照応していることを指摘した。そして、原拠本の本文は第二次本文と同文であり、ここに一部分ではあるが原拠本の片鱗をうかがうことができると考えた。

● [B] 〈斯道本〉の第二次本文と対応しない語句

ところで、ここで取り上げた部分について〈天草版平家〉の口語訳の原拠を考える上で、清瀬氏はきわめて重要な視点からの検証を欠いている。それは、第一次・第二次の両本文が同じであっても、それらと〈天草版平家〉の対応する語句とがよく照応しない例(換言すれば、〈天草版平家〉の語句がそれと対応する両本文の語句を口語訳したものではないと考えられる例)の存在を考慮していないことである。上記に該当するのは4

例である。そのうちの(A)を詳細に、(B) (C) (D)の3例を簡約して示す。

(A) 〈天草版平家〉さだめてこのやうなことをば維盛もさこそ存ぜられつらう：

(148-11 ~ 12)

表 A1 (上段の表の右から、下段の左へ続けて見る)

〈天草版平家〉		b さだめて	c このやうなことをば
〈斯〉第一次本文	a サレハ		d 権亮少将モ
〈斯〉第二次本文	a サレハ		d 権亮少将モ
d 維盛も	e さこそ	f ~存ぜられつらう。	
c カヤウノコトヲハ	e サコソ	f ~存知セラレケメ。	
c カヤウノコトヲモ	e サコソ	f ~存知セラレケメ。	

表 A2 (上段の表の右から、下段の左へ続けて見る)

〈天草版平家〉	*注 (a に対応の表現)	b さだめて	c このやうなことをば	d 維盛も
① 〈斯〉一●	a サレハ			d 権亮少将モ
② 〈斯〉二	a サレハ			d 権亮少将モ
③ 〈小〉	a 去レハ			d 今ノ平氏ノ大將軍維盛忠教モ
④ 〈鍋〉	a されば			d いまのへいじの大しやうぐん これもりたゞのりも
⑤ 〈竜〉●	a されは			d 今の平氏の大將維盛忠度も
⑥ 〈米〉	a されは			d 今の平氏の大將維盛忠度も
⑦ 〈竹〉				d 権亮少将 ^モ
⑧ 〈平〉	a 左有 ^{レハ}			d 権亮少将 ^モ

〈天草版平家〉			e さこそ	f ~存ぜられつらう。
① 〈斯〉一●		c カヤウノコトヲハ	e サコソ	f ~存知セラレケメ。
② 〈斯〉二		c カヤウノコトヲモ	e サコソ	f ~存知セラレケメ。
③ 〈小〉	b 定メテ	c 加様ノ事ヲハ		f ~被 ^セ 存 ^セ 知 ^セ タリケン。
④ 〈鍋〉	b さだめて	c かやうの事をば		f ~ぞんぢせられたりけん。
⑤ 〈竜〉●	b 定て	c かやうの事は		f ~存知せられたりけん。
⑥ 〈米〉	b 定	c か様の事は		f ~存知せられたりけん。
⑦ 〈竹〉		c 加様事ヲハ	e 左社	f ~存知セラレケメ。
⑧ 〈平〉		c 加様事ヲハ	e 左社	f ~存知セラレケメ。

*注 〈斯〉一●のa「サレハ」に相当する語句は〈天草版平家〉ではこの前文の「それといふは…でござる」に表現されている。

(参考) 〈高野本〉の該当の文も〈竜大本〉と同じである。

表 A1 においてわかるように、〈斯道本〉の第一次本文と第二次本文とは、c の助詞の「ヲハ」「ヲモ」が相違しているのみである。これは第一次本文の方が〈天草版平家〉と一致し、前後とも文意が一貫している。このほかにも、〈天草版平家〉のこの文には、第二次本文を口語訳したものと思えない点がある（表 A2 参照）。

(ア) 〈天草版平家〉の d 「維盛も」は①〈斯〉一●・⑤〈竜〕●などによく照応していない。

(イ) 〈天草版平家〉の文脈の混乱

(i) ①〈斯〕一●は、e (サコソ) + f (～ケメ) と係結びの法則 (コソ…已然形) 通り結んでいる。

②〈斯〕二・⑦〈竹〕・⑧〈平〕も同じである。

(ii) ⑤〈竜〕●は、b (定て) + f (～けん) と、強意の副詞…終止形で結ぶ。

③〈小〕・④〈鍋〕・⑥〈米〕も同じである。

①〈斯〕一●と⑤〈竜〕●などの文とは係結びなどから考えても、それぞれ通常のものとして成立したが、原拠の文は校合によってこれらの混合した首尾一貫しないものになった。

表 A3 (校合によって混合した文の例)

語句の原拠本の例	a サレハ 〈斯〕一	b 定メテ 〈竜〕	c カヤウノコトラハ 〈斯〕一	d 権亮少将維盛モ 〈斯〕一・〈竜〕
〈天草版平家〉		さだめて	このやうなことをば	維盛も
e サコソ 〈斯〕一	f 存知セラレケメ。 〈斯〕一			
さこそ	存ぜられつらう。			

〈天草版平家〉のこの文はそれを忠実に口語訳してしまったが、〈こそ (さこそ) + 已然形〉の係結びの法則が崩壊し始めていた室町時代末期の話し言葉として、「存知セラレケメ」を「存ぜられつらう」としても不自然とは感じなかったであろう。

表 B1 〈天草版平家〉山を重ね、水を隔てて行かるるほどに、(148-17)

〈天草版平家〉	a 行かるるほどに	(ナシ)
〈斯〉第一次本文	(ナシ)	b 日数経レハ
〈斯〉第二次本文	(ナシ)	b 日数フレハ

〈天草版平家〉の a 「行かるるほどに」も〈斯道本〉の第二次本文の b 「日数フレハ」の口語訳としてよく照応しているとは言えない。

『平家物語』諸本を調査してみると、〈竹柏園本〉においてこの部分の対応語句が次のようになっている。

表 B2

〈竹柏園本〉	a 行程ニ	b 日数経レハ
--------	-------	---------

おそらく〈竹柏園本〉の前の段階で「行ク程ニ」、又はそれに類する語句（「行カルル程ニ」など）を有するものがあり、〈竹柏園本〉は校合によって付記された「日数経レハ」が転写の際に本行に入り込んだものであろう。そして、原拠本は校異の語句が本行に入り込む前の段階で「行程ニ」、又はそれに類する語句になっていて、〈天草版平家〉の a 「行かるるほどに」はそれによったものであろう。

表 C1 〈天草版平家〉路次の兵どもが付いたによって、(148-21)

〈天草版平家〉	a 路次の兵どもが	b 付いたによって
〈斯〉第一次本文	a 路次ノ兵ノ	b 召シ具シテ
〈斯〉第二次本文	a 路次ノ兵	b 召具シテ

〈天草版平家〉の a の語句には複数を示す接尾語「ども」が添えられている。が、〈斯道本〉の第二次本文にはない。〈斯道本〉の第一次本文・〈小城本〉や覚一本系の〈竜大本〉などにもない。

ところが、〈鍋島本〉などの平仮名百二十句本には接尾語「ドモ」が付されている。

表 C2

〈鍋島本〉	a ろしのつはもの共（濁点アリ）	b めしぐして
-------	------------------	---------

a の原拠の語句は〈鍋島本〉のようであったと考えるのが穏当であろう。

又、主語・述語の関係などを考えると、斯道本の第二次本文は「〈平家ハ〉路次ノ兵〈ヲ〉召シ具シテ」の意になる。これに対して、〈天草版平家〉は「路次の兵どもが〈平家に〉付いたによって」となる。つまり、目的語を主語に変換するのに伴って述語〈動作語〉が他動詞「召シ具ス」から自動詞「付く」に転じている。

現存の『平家物語』の諸本を調査してみると、一方流の古写本・古刊本の中には次のような語句が対応しているものも存する。

表 C3

〈駒大本 27〉	〈流〉	a ろしのつはもの	b つきそひて
〈元和九年刊本〉 1623		a ^{ロシ} 路次ノ兵	b ^{ツキソヒテ} 附副テ
〈元禄十二年刊本〉 1699		a ろしの ^{つはもの} 兵	b つきそひて

〈天草版平家〉の b 「付いたによって」は〈斯道本〉第二次本文などの主語と目的語を転換することによって生じたのではなく、〈駒大本 27〉などに見られる「つきそひて」、又はそれに類する語句を原拠として口語訳したものと考える方が穏当であろう。そして、この部分の原拠の語句は a が百二十句本系の〈鍋島本〉などようになっていて、b が〈斯道本〉の第二次本文の類と一方流の〈駒大本 27〉などに見られる語句の類を有するものとを校合することによって成立し、それが結果において〈斯道本〉の主語と目的語とを転換した形になったと見るべきであろう。

表 D1 〈天草版平家〉^{ばんとう}坂東で^{いくさ}軍をせうと思ふと 言はれたれば (149-14 ~ 15)

〈天草版平家〉	a 坂東で軍をせうと	b 思ふと	c 言はれたれば
〈斯〉第一次本文	a 坂東ニテ軍ヲセント		c 急レケレハ
〈斯〉第二次本文	a 坂東ニテ軍ヲセント		c 云ワレケレハ

〈天草版平家〉の b 「思ふと」に対応する語句が〈斯道本〉の両方の本文に存しない。現存の『平家物語』諸本には、これと対応する語句を有するものがきわめて少ない。

表 D2

〈学習院本 5〉	a ひろみにていくさをせんと	b おもうふなりと	c はやられける
〈静嘉堂片仮名本〉	a 勝負ヲセント	b 思 ^ハ 如何ニト	c 宣へハ

〈天草版平家〉の b 「思ふと」の原拠は、〈学習院本 5〉の「おもふなりと」、又は〈静

嘉堂片仮名本)の「思フハ如何ニト」に類するものであっただろう。そして、天草版平家のこの箇所原拠は、〈斯道本〉第二次本文の類と〈学習院本5〉の類、又は〈静嘉堂片仮名本〉の類の語句を有するものとを校合することによって成立したものであろう。

〈天草版平家〉は和漢混交の文語文で綴られた『平家物語』を室町時代末期の話し言葉に訳したものである。しかも、右馬の允が尋ね、喜一検校がそれに答えて語るといふ、問答体に改編されている。それに伴って、付加されたり改変されたりした文や語句も存する。が、上記の(A) (B) (C) (D)の4項で取り上げた語句は、〈斯道本〉第二次本文を原拠にしてそのような操作をしたものではなく、〈斯道本〉第二次本文の類に各項であげたような諸本を校合することなどによって成立したものであると推測できよう。

(四) [口] の範囲の後部の逐語訳の顕著な部分

現存の『平家物語』諸本の中で、〈斯道本〉が〈天草版平家〉の原拠本に最も近い本文を持つと考えられるのは、[口]の後部の範囲である。

〈天草版平家〉の本文を〈斯道本〉と対照してみると、[口]の前部(巻Ⅱ第2章～巻Ⅲ第8章)よりも[口]の後部(巻Ⅳ第2章～第28章)の方が一致またはよく照応する語句が多い。この部分は〈斯道本〉が原拠本そのものではないかと感じるほどである。

● [A] 一致またはよく照応する語句が〈斯道本〉にのみ見られる場合

現存の百二十句本系の諸本の中で〈斯道本〉にのみ見られる語句について、表記の上から三項に整理して例をあげてみよう。

(a) 〈斯道本〉の本行に見られる例

1 〈天〉千手心をすまいて、一樹の蔭に宿り、一河の流れを汲むもこれ前世の宿縁ぢやという▼拍子をか▼すまいたれば、(304-2)

〈斯〉⁽¹⁾白拍子ヲカエスマシケレハ、

〈小〉⁽¹⁾白拍子ヲカエス…⁽²⁾謡^{ウタ}スマシケレバ、

〈竹〉⁽¹⁾白拍子ヲ員へ澄シタリケレハ、

〈屋〉⁽¹⁾白拍子ヲカエスマシタリケレハ、

〈竜〉⁽¹⁾白拍子を…⁽²⁾かそへすましければ、

(2)「か▼すまいたれば」がよく照応するのは〈斯道本〉のみである。〈斯道本〉の「カエ」は脱落によって生じたものであろう。もとの形は「カズへ」、又は「カヅへ」であったかもしれない。(1)の「▼拍子を」と対応する語句は『平家物語』諸本では「白拍子」となっている。(2)の原拠の語句が「カエ…」となっていて、これを口訳者が「変へ…」と解し、「拍子を変へて」(6-1・7-4)などから類推して「白」を削ったものであろう。

その他に、

2 〈天〉滝口が返事には：剃るとても何か恨みん梓弓、…。(309-4)

〈斯〉滝口カ返事ニ、…、〈小〉横笛返事、…、〈屋〉横笛カ返事ニ、…、

(歌の作者が混乱している。〈天〉は〈斯〉を原拠にした。)

など、多く見られる。

(b) 〈斯道本〉の校異・訂正などの傍書に見られる例

3 〈天〉(重盛は) 六代が男になれば、松王も羨しからうと仰せられて、同じう
もどり 誓 取り上げられまらして、盛の字は家の字なれば、六代に付くる：重の字をば
松王に下さるとあって、重景と名のらさせられた。(313-13～16)

〈斯〉五代カ男ニナルナレハ、…五代ニ付ク、

〈小〉五代ガ男ニナルナレバ、…五代ニ付クル、

〈鍋〉五だいがおとこになるなれば、…五たいにつくる、([] は不鮮明)

「五代」は維盛の幼名か。〈斯道本〉は「六」と傍書してあるが、「六代」(維盛の長男)は文脈上から誤りである。

その他に、

4 〈天〉一度にどっとほめて、しばしは鳴りも静まらなんだ。(337-15・16)

〈斯〉シバシ (ミセケチ) 動揺ケリ (ミセケチ) ドヨミ 一度ニトツト器テシハシハ鳴(ナリ)モシスマラス ○。

〈鍋〉とよめきけり。〈屋〉トヨミケリ。

などがある。

〈天草版平家〉が〈斯道本〉の校異・訂正などの傍書と一致またはよく照応する例は多い。が、これに相当する〈斯道本〉の大部分は〈小城本〉とも一致する。それ故、この項に該当する例は少ない。

(c) 〈斯道本〉に校異・訂正など記されているが、もとの本行に見られる例

5 〈天〉(家光が義仲に)あれほど敵の攻め近づいてござるに、ここでは犬死をさせられうず：急いで出させられいと、申したれども：(238-17)

〈斯〉出サセ玉ヘ (ミセケチ) ト、

〈小〉出サセ玉ハDET、

〈天草版平家〉の「出させられいと」は〈斯道本〉で訂正される前の「出サセ玉ヘ」を口語訳したものであろう。

その他に、

6 〈天〉出家の望み、志があるをば…。(294-7)

〈斯〉出家ノ望（ミセケチ）、志シ有ヲハ、〈小〉出家ノ志シ有ヲハ、
など、多く見られる。

(a) (b)の両項にあげた例は、〈天草版平家〉の原拠本が〈斯道本〉と同じ本文を有する
ものであったという推論の根拠になる。又、(c)項の例も、本行の語句と傍書の訂正や校
異の語句とを比べて、本行の語句を採用したと仮定すれば、上の推論と矛盾しない。

● [B] 対応する〈斯道本〉の語句と一致またはよく照応すると言えない場合

ところで、(a)の範囲の後部全体にわたって一語一語検討してみると、〈斯道本〉の対応
する位置に一致またはよく照応する語句を見出すことができないものも存する。それら
が存在する諸本により三項に整理して、例をあげてみよう。

(a') 一致またはよく照応する語句が〈斯道本〉以外の百二十句本系、覚一本系、八坂流
甲類などの諸本に見られる例

(a'1) 〈斯道本〉以外の百二十句本系諸本

7 〈天〉昌尊が勢五十余騎さんざんに駆け破られて、残り少^{すく}なう討たれた。

(377-8)

〈斯〉昌俊、〈小〉同左、〈鍋〉しやうぞん、

「昌尊」は「土佐昌尊」をも含めて十四例見られる。これらは XOZON、Xōzon 〈Tof
axōzon〉、Xōzo と綴られている。〈斯道本〉〈小城本〉のような「昌俊」の例はなく、す
べて〈鍋島本〉などの「しやうぞん」と一致する。

その他に、

8 〈天〉現^{うつつ}とも (310-2) — 〈斯〉幻トモ、〈小〉幻トモ現トモ、

9 〈天〉動^{うご}きえず (273-20) — 〈斯〉動^うキエス、〈小〉動^うキエス、〈鍋〉はたら
きえず、

など多く見られる。

(a'2) 覚一本系の〈竜大本〉など、

10 〈天〉さござらば家光は先⁽¹⁾づ先⁽²⁾立ちまらすと、言ひさまに、刀を抜いて、
…、腹を切つて死んだ。(238-20)

〈斯〉死出山ニテ待マイラセントテ、

〈小〉〈鍋〉〈京〉〈久〉：上と同語句。

〈竜〉まつ⁽¹⁾さきたちま⁽²⁾いらせて、四手の山てこそ待まいらせ候はめとて、

〈高〉〈慶〉〈米〉：上と同語句。

〈竹〉▼先立進テ、

〈平〉〈鎌〉：上と同語句。

その他に、

11 〈天〉御迎ひに遣^{つかは}さるれば、(297-4)

〈斯〉参りケリ。〈鍋〉まいらせ給へば、〈竜〉つかはしたりければ、
などが見られる。

(a'3) 八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉など

12 〈天〉能登殿菊王が首を敵⁽²⁾に取らせまじいと言うて、それをひっさげて船に
お乗りあつたれども、痛手であつたれば死んだ。(333-21)

〈斯〉敵⁽²⁾頸ヲ⁽¹⁾、〈鍋〉かたきにくびを、

〈竹〉菊王カ頸ヲ敵⁽²⁾ニ、 : 〈平〉〈鎌〉〈享〉 左と同じ。

その他に、

13 〈天〉明かし暮された。(288-3) — 〈斯〉明シ玉ヒケリ。〈竹〉明シクラシ玉
ヒケリ。

などが見られる。

又、〈竹柏園本〉や〈平松本〉と合せて〈竜大本〉などとも一致またはよく照応する例
もかなり見られる。

14 〈天〉小野の皇太后宮^{くわうたいこうぐ}(395-7)

〈斯〉小野皇太后宮、〈鍋〉をのゝたかむら大こうぐう、〈竜〉小野の皇太后宮、

〈竹〉小野皇太后宮。

この項であげた (a'1) (a'2) (a'3) の例はいずれも〈斯道本〉の対応語句とよく照応せ
ず、他の諸本に一致またはよく照応する語句が見出されるものである。〈斯道本〉を原拠
本として宛てた場合、これらの語句の存在を説明することができない。

(b') 一致またはよく照応する語句が百二十句本系、覚一本系、八坂流甲類などの諸本
のいずれにも見出すことができない例、

(b'1) 原拠本の文章の要約

15 〈天〉その後景清が出て、水尾谷^{みおのや}が甲の鍔を引きちぎってこそ、平家方にも
そつと色を直いてあつた。(337-24 ~ 338-2)

〈斯〉本意^{ホイナシ}無トヤ思ケン、…武藏国ノ住人水尾谷四郎、同十郎…ヲ始トシテ五騎連
テソ懸ケタリケル。…引切タル^{しころ}〈水尾谷の〉審ヲ指拳テ、平家ノ侍ニ上総悪七
兵衛景清ト名乗り捨テソ販ケル。

その他に、

16 〈天〉古い事どもを引き出して…。(397-9 ~)

〈斯〉事新シキ申事ニテハ侯ヘトモ…。

などが見られる。

これらは〈斯道本〉を原拠本に想定すると、〈天草版平家〉の本文は厳密な意味での要約にはなっていない。部分の省略とか抄出というような要素も存する。

(b2) 原拠本の語句の意訳

17 〈天〉 楽しみ尽きて、悲しみ来たるは世の習ひでござる。(364-16)

〈斯〉 楽ミ尽テ、悲ミ来ルハ天人ノ五衰ノ日ニ逢ヘリトコソ申候へ。

その他に、

18 〈天〉 通盛は…いかにも悠々と…折に似合はぬ体ていに臥されたによって、

(257-23・24) — 〈斯〉 越前三位通盛ハ女房ヲ請シテ臥玉ヘリ。

などが見られる。これらには、故事の知識がなければ理解できない語句をやさしく言いかえ、男女の関係を表わすのに露骨な表現を避け、抽象的表現を具体化するなど、キリシタンの宣教師たちの日本語学習のテキストとしての配慮がなされている。そのことは他面から見れば、〈天草版平家〉の語句に対応する表現が〈斯道本〉などに存しながら、一々の語がよく照応するとは言えない結果をもたらしている。

(b3) 口訳者の補入

19 〈天〉 〈源平の合戦の前後の平時忠の所業を述べてから〉されども時至って運
尽くれば、かくのごとくぢゃ。(370-18・19)

その他に、

20 〈天〉 平家方にもそっと色を直いてあつた。(例1の後部、338-2・3)

21 〈天〉 …と申す。(272-7・273-4・275-19…)

22 〈天〉 …と聞えまらした。(278-1・17, 290-23…)

などが見られる。これらは口訳者の感想や補足説明、問答体に改めたために添えられた語句である。

(b4) 誤読・誤写

23 〈天〉 巴ともえといふ女武者があつたが、その頃よはい 齢は二十三で、太刀には強う、
弓の精兵 究竟くつきやうの荒馬乗りの悪所落として、(243-6)

〈斯〉 大カラ強弓ノ精兵…、〈小〉 大カツヨノ強弓ノ精兵…、

〈鍋〉 大ぢからのつよゆみせいびやう…、

その他に、

24 〈天〉 船たる船ども (381-2) — 〈斯〉 乗タル船トモ、

などが見られる。

(b5) 誤脱

25 〈天〉〈敵の武者が〉渚へうち上ぐるところを熊谷願ふところなれば、駒^{かしら}の頭も▼あへず、押し並べて組んで落ち、…。(276-11) — 〈斯〉…駒ノ頭モ直^{ナラシ}モアヘス、…。

その他に、

26 〈天〉ござる▼、熊王と申して…、(260-22) — 〈斯〉候トテ、熊王丸ト申シテ…、

などが見られる。

(b') の (b'1) (要約)・(b'2) (意識)・(b'3) (補入) の例については、〈天草版平家〉の語句とよく照応する語句が〈斯道本〉の対応する部分に存しなくても、〈斯道本〉を原拠として用いたと考えることが可能である。又、(b'4) (誤読・誤写) と (b'5) (誤脱) の例についても、原拠本の語句を読み、口語訳文を作り、ローマ字に翻字して植字する過程で、誤謬が生じたと仮定すれば、原拠本として〈斯道本〉を宛てることも可能である。

(c') 原拠の語句を口語訳または踏襲したと推測される例

27 〈天〉〈重衡が法然上人に〉髻切って、たちまち授戒させられいかしと申されたれば：(294-24)

〈斯〉髻り付乍ラ…、：〈小〉〈鍋〉左と同語句。

〈竜〉〈竹〉〈平〉：該当語句 ナシ。

その他に、

28 〈天〉度々に及うだれば、(242-13) — 〈斯〉度々ニ及フト云ヘトモ、

29 〈天〉これを文覚すさみまらし、(407-13) — 〈斯〉高尾ノ文覚是ヲ見奉り、などが見られる。

これらの例については、〈斯道本〉をはじめとする現存の百二十句本系の諸本からは単純に説明することができない。すべての例の原拠を〈斯道本〉に関連づけるのは無理である。

(五) むすび

以上、〈天草版平家〉の口の範囲の原拠本について、〈斯道本〉とどのような関係に立つものであるかを解明するために、3項に着目して調査検討した。

(i) 第二節で述べたように、「重衡の東下りのこと」の条の冒頭部分は、口訳者が原拠本の本文をそのまま引用しようと意図した部分である。〈天草版平家〉に〈斯道本〉と異なる語句が存するけれども、日本語を学ぶ外国人宣教師たちが理解しやすいようにしよう

という編纂方針を汲み入れて、多少の操作をしたと仮定すれば、原拠本の本文が〈斯道本〉と同文であったと考えることもできる。

(ii)第三節で述べたように、〈斯道本〉の第二次本文と対応する部分は、第一次本文にも対応する部分が存する。そして、これらを対照してみると、第二次本文の方がよく照応する。が、それにも口語訳の原拠として宛てることのできない語句や表現が存する。そのような場合、〈鍋島本〉をはじめとする百二十句本系、〈竜大本〉をはじめとする覚一本系、〈竹柏園本〉をはじめとする八坂流甲類などの諸本に、原拠またはそれに関連すると思われる語句や表現が存する。

(iii)第四節で述べたように、[口]の後部の範囲は概して〈斯道本〉とよく照応する。しかも、百二十句本系の諸本の中で〈斯道本〉とのみ一致またはよく照応する語句もかなり存する。ところが、対応する〈斯道本〉の語句や表現とよく照応すると言えないものも存する。それらを整理すると、次のようになる。

(a) 〈斯道本〉以外の百二十句本系、〈竜大本〉をはじめとする覚一本系、〈竹柏園本〉をはじめとする八坂流甲類などの諸本に、原拠またはそれに関連すると思われる語句の見られるもの。

(b) 原拠本の本文を要約したり、語句を意識したり、口訳に際して補入したり、誤読・誤写・誤脱によって生じたりしたことによると思われるもの。

(c) 現存の諸本では見つけられないが、原拠の語句を口語訳または踏襲したと推測されるもの。

〈天草版平家〉の原拠本として〈斯道本〉を宛てると言う場合、2つの方法が考えられる。

(i) 〈斯道本〉そのもの。第一次・第二次の両本文と対応する部分は第二次本文で修正。

(ii) 〈斯道本〉の第二次本文と同文で、その前後も一貫したもの。現存せず、内容の一部を第二次本文で知るのみ。

(i)および(ii)の (b) 項に該当する語句や表現の存在は、これらの見解を必ずしも否定するものではない。が、原拠本をと仮定すると、(ii)および(ii)の (a)・(c)の両項に該当する語句や表現の存在を説明することができない。又、と仮定すると、その内容は第二次本文に相当する部分しかわからないが、やはり(ii)に該当する語句や表現の存在を説明することができない。

私は今回の(i) (ii) (iii)の調査と検討の結果を踏まえて、原拠本がよりもに近く、次のようなものであったと推測する。

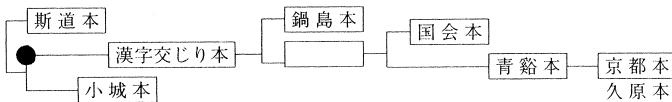
(i) 〈斯道本〉の第二次本文の類に、覚一本系の〈竜大本〉の類、および八坂流甲類の〈竹

柏園本)の類の語句や表現が校合などの方法で取り入れられて成立したものの。

なお、上の〈竜大本)の類は〔イ〕の範囲で、〈竹柏園本)の類は〔ハ〕の範囲で、それぞれ原拠本として用いられたものことである。又、調査に用いた〈斯道本)〈竜大本)〈竹柏園本)などの諸本は、それぞれの範囲の原拠になった本そのものでなく、多少の相違を有する異本性格のものである。その相違が(iii)の(a)項(〈斯道本)以外の百二十句本系諸本によく照応する語句が見られる例)や(c)項(現存諸本によく照応する語句が見られないが、原拠の語句を口語訳または踏襲したと推測される例)に該当するような語句として現われたのであろう。

資料⑤ 〈天草版平家)の〔ロ〕の範囲の原拠本の推測

山下宏明氏は『平家物語研究序説』(山下:昭47)において、百二十句本として〈斯道本)以下の7本をあげ、これらの諸本の関係を次のように推測している。ただし、〈久原本)の位置付けがなされていないので、仮に欄外に添えることにする。



これは諸本論の立場から現存本をもとにして作成した仮説の図である。したがって、山下氏が私に語られたように、新本が発見されれば修正されることになる。が、现阶段ではこの図を用いて論を進めた。図中の●印が私の推測した原拠本の位置である。

第五章 原拠本の本文の検証〔Ⅲ〕〔ハ〕巻八に対応の範囲

(一) はじめに

〈天草版平家)の該当の範囲〔ハ〕は『平家物語』(十二巻本)の巻八に対応する記事が存し、その前後の範囲〔ロ〕は『平家物語』の前部(巻四～巻七)と後部(巻九～巻十二)に対応する記事が存する。そして、この〔ロ〕の原拠本は現存の諸本を基準にして考えると、百二十句本系の〈斯道本)にきわめて近い。

〈斯道本)は巻八を欠く。〈天草版平家)のこの範囲〔ハ〕に、前後の範囲〔ロ〕と同様、原拠本として〈斯道本)の第二次本文の類を基幹とするものが用いられているならば、現存の『平家物語』の中でそれに近いのは同じ百二十句本系の〈小城本)〈鍋島本)ということになる。ところが、〈天草版平家)を両本と比較してみると、その語句などと対応する部分が両本に存しない、又は存してもよく照応しないという箇所が目立つ。

この章でも『平家物語』の古写本・古刊本のうち、原拠本に関連する語彙・語法などが存すると思われるもの 100 本余りについて調査した。そして、その結果を考慮して次の 8 本について、〈天草版平家〉の該当の範囲 [ハ] とを全体にわたって照合した。

- ① 百二十句本系 〈小城本〉〈鍋島本〉
- ② 八坂流甲類 〈竹柏園本〉〈平松本〉〈享禄本〉〈鎌倉本〉
- ③ 一方流 〈竜大本〉〈米沢本〉

そして、文や語句の比較的長い部分について、主として諸本間における有無・異同・順逆という点から相違のある 40 項目を取り出し、次の 3 段階に分類した。

- a よく照応する。(又は㉑)
- b よく照応しない、又は相違する。(又は㉒)
- c 対応する部分が存しない、又はその大半が存しない。(又は㉓)

ただし次節で触れるが、この 40 項目には②八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉の 2 本のうちのいずれかは㉑段階に該当するものに限る。

例 (番号の数字は表 1 のもの、本文の対応箇所「+++」は語句や文が存しないこと、又…は引用の省略箇所を示す)

(10) 〈天草版平家〉(213-3 ~ 4)

〈天〉そこで木曾殿(兼康を)剛の者と聞いたが、ゆかしさに今まで切らいでおいた、
何ほどのことがあらうぞ? 追ひかけて討てと言はれたれば:

〈小〉木曾 剛ノ者ト聞シユエニコソ、今迄キラデ置ヒタリツレ、+++、…トゾ
宣ケル。 …b

〈竹〉木曾殿剛ノ者ト聞シカ、牀シサニ社今マテ切ラテハ置タリツレ、+++、…ト
ゾ宣ケル。 …a

〈平〉木曾殿甲者^ト聞^{シカ}、床^{シサニコソ}今及^{ヲテハ}切^{タリツレ}置、+++、…(討)宣。 …a

〈享〉+++++++、+++、…トゾ宣ケル。 …c

〈竜〉+++++++、…とその給ひける。 …c

(17) 〈天草版平家〉(216-15 ~ 17)

〈天〉(木曾殿)これこそ一人当千の兵とは言はうずる者どもなれ:…と言はれてござ
る。

〈小〉(木曾殿)+++++++、…トゾ宣ヒケル。 …c

〈竹〉(木曾殿) 是ヲ社一人当千ノ兵共云ヘケレ、…トソ宣ヒケル。

…^(a)

〈平〉(木曾殿) 是^ヲコソ一人当千兵共^{ケレ}可^レ云、…(見^テソ)宣^{ヒケル}。

…^(a)

〈享〉(木曾殿) 是ヲコソ一人当千ノ兵トモ云可ケレ、…トソ宣ヒケル。

…^(a)

〈竜〉(木曾殿) 是こそ一人当千の兵ともいふへけれ、…とぞ宣ひける。 …^(a)

〈天草版平家〉との比較に用いた8本のうちの1本もa(よく照応する)の段階として認定できないことがある。その場合は、〈竹柏園本〉〈平松本〉がともに〈天草版平家〉とよく照応するとは言えない。したがって、それらの例は表1で取り上げないことになる。

▼(i) 〈天〉さて経正の歌には、分けて来し野辺の露とも消えずして、

思はぬ里の月を見るかな。 と、思ひ思ひに詠うで慰さうでゐられてござる。

(200-23 ~ 24)

◇傍線の部分に対応する語句

〈竹〉〈平〉〈小〉〈享〉〈鎌〉〈竜〉〈米〉：ナシ。

〈鍋〉あはれなりし事どもなり。

上と同語句：〈国〉〈京〉など。

▼(ii) 〈天〉その時天下の体は大方三つに分かれたやうなものでござった。(227-21 ~ 23)

◇対応する語句

〈竹〉〈平〉〈小〉〈鍋〉〈享〉〈鎌〉〈竜〉〈米〉：ナシ。

上記の▼印2例は、他の『平家物語』の古写本・古刊本にもよく照応する語句を見つけることができなかった。▼(i)は原拠本によく照応する語句が存して、それを口語訳したという可能性も否定できない。▼(ii)は、前後の事情をよく理解できるように、口訳者が補って説明したものであろう。前者のような例はあまり多くないが他にも存する。それ故、両本と原拠本との隔たりを推測する場合、きわめて高い「よく照応する」の比率は多少さし引いて考えなければならない。

(二) 『平家物語』 諸本との対校状況

〈天草版平家〉の本文と『平家物語』 諸本との対校状況を、文や語句の比較的長い部分について示すと、次のようになる。

なお、調査の基準は前節の後部に示したものによる。

表1 『平家物語』諸本との対校の箇所

番号	〈天草版平家〉 の頁・行	〈天草版平家〉の対校の箇所	小 城 本	鍋 島 本	竹 稻 園 本	平 松 本	享 禄 本	鎌 倉 本	竜 大 本	米 沢 本
1	199-17 ~ 20	順序：平家は…歌を詠うづ、連歌をして…。さうあって…九州二島の人数は…、…：	b	b	a	a	b	b	b	b
2	199-22 ~ 23	住みなれし古き都の恋しさは、神も昔を忘れ給はず。	a	a	b	a	b	b	b	b
3	200-10 ~ 22	四首の歌の有無と順序：経盛、行盛、忠度、経正。	b	b	a*	b	b	b	b	b
4	206-22 ~ 207-1	猫間殿は御器の不審さに食はれなんだれば、(木曾が)…と言ふによつて、	c	c	a	b	b	b	a	b
5	207-8 ~ 9	猫間殿が帰られてから、木曾も出仕をせうと言うて出立ったが、	a	a	a	a	c	c	b	b
6	207-16 ~ 18	(車をば宗盛の遣った弥次郎が)世に従ふ習ひなれば、力に及ばいで召されてやったが、	c	c	a	a	b	b	b	b
7	210-15 ~ 19	(木曾は一万余りで馳せ下り)…備中の国の兼康は北国の戦 <small>いくさ</small> に倉光の手にかかって生け捕られたが、	b	b	a	a	a	a	a	a
8	211-18 ~ 212-2	兼康が親しい者ども酒を持たせて来て、…、これ(備前の国の代官)をも討ち殺いて、	b	b	a	a	a	a	a	a
9	212-10 ~ 16	(備前、備中、備後の三が国の兵共)いかにも見苦しい出立ちで、やじりをそろへて待ちかけていてござる。	c	c	a	a	a	a	a	a
10	213-3 ~ 4	そこで木曾殿(兼康を)…今まで切らいでおいた、…追ひかけて討てと言はれたれば：	b	b	a	a	c	c	c	c
11	213-8 ~ 21	そのあたりは深田で…、兼平を初めて歴々の者ども…、喚 <small>をめ</small> き叫うで攻め戦ふが、	c	c	a	a	a	a	a	a
12	213-23 ~ 214-4	(兼平は)あるいは谷の深いをも嫌はず、…一日戦ひ暮らいたれば、兼康その城を攻め落されて、	c	c	a	a	a	a	a	a

13	214-7～9	(兼平) 矢種のあるほどこそは防ぎ戦うたれ：われ先にと落ちて行くほどに、	b	b	a	a	a	a	a	a
14	215-9～13	(兼康) たとひ命生きて二度平家の…言はれうことは恥かしいと言うたところで、	c	c	a	a	a	a	a	a
15	215-16～17	郎等が返事には：さござればこそ…(兼康は)心得たと言うて、とって返いてみれば：	b	b	a	a	a	a	a	b
16	216-2～12	兼平まっ先駆けて…、兼康…自害せうとするところを生け捕りにせられた：	b	b	a	a	a	a	a	b
17	216-15～17	(木曾殿) これこそ一人当千の兵とは言はうずる者どもなれ：…と言はれてござる、	c	c	a	a	a	a	a	c
18	217-2～3	木曾さらばと言うて、夜を日について、馳せ上らるれば、	c	c	a	a	a	a	a	a
19	217-6～8	平家また木曾を討たうずると言うて、知盛を大将にして…千余艘の船に乗って、	b	b	a	a	a	a	a	b
20	217-14～17	二番目の陣は家長と言ふ人…通いた。…四番目まではそのごとくにして通いて、	c	c	a	a	a	c	a	b
21	219-18～20	(判官) 木曾はをこの者でござる：…、急いで御成敗なされいと、申したれば：	b	b	a	a	a	a	a	b
22	220-3～5	木曾は法皇の御気色…、みな木曾を背いて法皇のお方へ参った、	b	b	a	a	a	a	b	b
23	220-7～8	兼平が申したは：これこそもつてのほかの御大事でござれ：	c	c	a	a	a	a	a	b
24	220-16～24	たとへば都の守護としてあらうずる者が…、僻事であらうずれ、	b	b	a	a	a	a	a	a
25	221-1～2	順序：今度は木曾が最後の軍であらうず。頼朝が返り聞かうずるところもあるぞ、	c	c	a	a	a	a	a	a
26	222-3～6	簞矢のうちへ火を入れて、法住寺殿の御所に…、炎は虚空に満ち満ちたところで、	c	c	a	a	a	a	b	a
27	222-7～9	軍奉行が落つる上は、二万余りの官軍ども我先にと落ちて行くが、	b	b	c*	a	a	a	a	b

28	222-10～12	順序：あるいは弓の筈 ^{はず} を物にひっかけて…、あるいは長刀を逆様に突いて…、	b	b	a	a	a	a	b	b
29	222-20～21	これは院方のものぞ、…、言うたれども、さな言はせそ、ただ打ち殺せ…と言うて、	c	c	a	a	a	a	a	b
30	222-22～24	あるいは馬を捨てて逃ぐる者…、あるいは打ち殺さるる者…。	b	b	b*	a	b	b	a	c
31	223-9～10	さて法皇をば五條の内裏へ押し籠めまして、厳しう守護しまらしてござる：	c	c	a	a	a	a	a	a
32	223-20～23	それから木曾は…家の子郎等どもを呼び集めて、…戦に勝った上は、	c	b	a	a	a	a	a	b
33	223-23	順序：主上にならうか？ 法皇にならうか？	c	a	a	a	a	a	a	a
34	224-5～7	覚明（木曾の書き役）が言うたは：殿は源氏で…これこそをかしいこととござらうずれ。	c	c	a	a	a	a	a	a
35	225-11～17	頼朝もこの狼藉を聞いて…：先ずこれから関東へ子細を聞いて申さうずると言うて、	b	b	a	a	a	a	a	a
36	226-7～9	（公朝が頼朝に）（鼓判官を）なほ召し使はるるならば、…申し上せられたならば、	b	b	a	a	a	a	a	a
37	226-12～15	鼓判官…、向かうたが、…日ごとに頼朝の館へ向かうたが、…生きてゐました。	c	c	a	a	a	a	a	a
38	226-19～22	平家の大將宗盛は大きに喜ばれたれども、…一門の衆は一向これを受け付けられなんだ。	b	b	a	a	a	a	a	a
39	226-22～24	子細は世は末になったといへども、木曾連れに語らはれて御入洛あらうことは：	b	b	a	a	a	a	a	a
40	227-23～228-1	平家は西国にみられ、頼朝は関東にあれば、木曾は京に居て…：諸国の道が皆乱れて…。	a	a	a	a	c	c	b	b

〈注〉(3)* 〈竹〉 a：月見の歌が4首存し、順序・作者とも同じであるのはこれのみ。

㉒)* 〈竹〉 c：この文はナシ。誤脱したものか。

㉓)* 〈竹〉 b：「拾（行書）テ」は誤写から生じたものか。文脈も意味も異なるので取りあげた。他本は「捨て」「すて、」などがある。

この『平家物語』諸本との対応状況を集計して示すと、次のようになる。

表2 (文や語句の比較的長い部分の)『平家物語』諸本との対応状況

『平家物語』諸本	a. よく照応する	同左の比率(%)	b. よく照応しない、相違する	c. 存しない、大半が存しない
〈小城本〉	3	7.5	19	18
〈鍋島本〉	4	10.0	20	16
〈竹柏園本〉	37*	92.5	2*	1*
〈平松本〉	38	95.0	2	0
〈享禄本〉	31	77.5	6	3
〈鎌倉本〉	30	75.0	6	4
〈竜大本〉	30	75.0	9	1
〈米沢本〉	19	47.5	18	3

ここで調査した8本の原拠本からの距離は、上表によって大概を把握することができる。

〈天草版平家〉とよく照応するのは〈小城本〉が3例(7.5%)、〈鍋島本〉が4例(10.0%)である。これに対して、〈竹柏園本〉37例(92.5%)、〈平松本〉38例(95.0%)である。両者の間には、その比率の上で大きな差がある。8本のうちで原拠本にきわめて近い本文を有するのは、八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉である。続いて〈享禄本〉〈鎌倉本〉〈竜大本〉、更に離れて〈米沢本〉ということになる。〈小城本〉〈鍋島本〉は他の6本よりかなり遠い位置にある。それ故、〈小城本〉〈鍋島本〉に近い本文を有する〈斯道本〉第二次本文の類を基幹とするものが巻八に関しては原拠本として用いられていない、換言すれば、該当の範囲[ハ]については前後の範囲[ロ]とは別種のもが原拠本として用いられている、と考えざるを得ない。

(三) 原拠本と〈竹柏園本〉〈平松本〉との関係

〈天草版平家〉の原拠本に近いのは八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉であることを、よく照応する項目数の比率の高いことをもって検証した。これについては、次の二つの点に注意することが必要である。

文および比較的長い語句で8本に異同のある40項目のうち、〈竹柏園本〉は37項目、〈平松本〉は38項目が〈天草版平家〉とよく照応する。しかも〈竹柏園本〉のよく照応すると言えない3項目は〈平松本〉がよく照応し、〈平松本〉のよく照応すると言えない2項目は〈竹柏園本〉がよく照応する。

● [A] 〈平松本〉がよく照応する3項目

(2) 〈天草版平家〉(199-23)

〈天〉住なれし古き都の恋しさは、神も昔を忘れ給はず。

〈小〉栖馴シ古キ都ノ恋シサハ、神モ昔ヲ忘レ玉ワジ。 ……a

▽ 〈竹〉栖馴シ旧キ都ノ恋シサハ、神モ昔ニ思ヒ知ラン。 ……b

○ 〈平〉^{スミ}栖馴^{レシ}旧^キ都^ノ恋^{サハ}、神モ昔ヲ忘給ハシ。 ……a

〈竜〉すみなれしふるき宮この恋しさは、神もむかしにおもひしるらむ。 ……b

(27) 〈天草版平家〉(222-7～9)

〈天〉^{いくさ}軍奉行が落つる上は、二万余りの官軍ども我先にと落ちて行くが、

〈小〉行事カ落ル上ハ、孰^{イツレ}カ一人残ルヘキ、我先ニト 落行ニ、 ……b

〈鍋〉ぎゃうじおつるうへは、なじかは一人ものこるべき、われさきにとおちゆくに、 ……b

▽ 〈竹〉++++++、++++++、++++、++++。

(この文はナシ) ……c

○ 〈平〉行事カ落上ハ、二万余人官軍トモ、我先ニトソ 落行ケル。 ……a

〈享〉行事カ落上ハ、二万余人ノ官軍共、我先ニトソ 落行ケル。 ……a

〈竜〉行事かおつるうへは、二万余人の官軍とも、我さきとそ落ゆきける。 ……a

(30) 〈天草版平家〉(222-22～24)

〈天〉あるいは馬を捨てて逃ぐる者もあり、あるいは打ち殺さる者もござった。

〈小〉或ハ馬ヲ捨テ、逃ル者モアリ、散々ノコト (合字) トモ (合字) ナリ。 ……b

▽ 〈竹〉或ハ馬ヲ拾テ逃者モ有、…。 ……b

○ 〈平〉或^マ馬^ヲ捨^テ、逃^ル者^モ有、…。 ……a

〈享〉或ハ馬ヲ捨テ匍匐逃者モ有、或衣^ル 打殺^サ 者^モ有。 ……b

〈竜〉或は馬をすてはうゝゝ (おどり字) にくる者もあり、或はうちころさるゝも
ありけり。 ……a

〈米〉或は馬よりころびおちやうやうにぐる物もあり、…。 ……c

● [B] 〈竹柏園本〉がよく照応する2項目

(3) 〈天草版平家〉(200-11～22)

平家一門の人々が西国へ落ち行き、九月十三夜の月を見て、都でのことを思い出し
て詠んだ歌がある。4首の歌を〈天草版平家〉の順序に従って示すと、次のようになる。

表3 〈天草版平家〉の月見の歌の順序と作者、歌の内容

順序・作者名	〈天草版平家〉の歌	備考
[1] 経盛 <small>つねもり</small>	恋しとよ去年 <small>こぞ</small> の今宵 <small>こよひ</small> の夜もすがら、 契りし人の思ひ出られて、	
[2] 行盛 <small>ゆきもり</small>	君住めば、ここも雲居 <small>いり</small> の月なれど、 なほ恋しきは都なりけり、	幸盛 とも
[3] 忠度 <small>ただのり</small>	月を見し去年 <small>こぞ</small> の今宵 <small>こよひ</small> の友のみや、 都にわれを思ひ出づらん、	忠教 とも
[4] 経正 <small>つねまさ</small>	分けて来し野辺 <small>の</small> の露 <small>つゆ</small> とも消えずして、 思はぬ里の月を見るかな、	

(参考：53頁の資料)

〈天草版平家〉の4首の歌を基準にして、諸本における有無と順序を(作者名)によって示そう。

表4 『平家物語』諸本における月見の歌の有無と順序(作者名)

	経盛	行盛	忠度	経正	
〈天〉	経盛	行盛	忠度	経正	
○〈竹〉	経盛	幸盛	忠度	経正	㉑
▽〈平〉	経盛	ナシ	忠度	経正	㉒
〈小〉	経盛	ナシ	忠度	経正	㉓
〈鍋〉	忠度	ナシ	経盛	経正	㉔
〈享〉	経盛	ナシ	忠度	経正	㉕
〈鎌〉	経盛	ナシ	忠教	経正	㉖
〈竜〉	忠教	ナシ	経盛	経正	㉗
〈米〉	忠教	ナシ	経盛	経正	㉘

〈天草版平家〉の4首の歌のうち、全部が存し、順序も一致しているのは〈竹柏園本〉のみである(本章の終りの記事を参照)。他の諸本には行盛(幸盛)の歌が無い。又、〈鍋島本〉〈竜大本〉〈米沢本〉は忠度(忠教)の順序が異っている。(注意)〈竹柏園本〉では、同一人物でも他の箇所では「行盛」ともある。

(4) 〈天草版平家〉(206-22 ~ 207-1)

〈天〉猫間殿は御器の不審さに食はれなんだれば、(木曾が) …と言ふによって、

〈小〉+++++++ (この語句はナシ)、…、

…㉑

〈鍋〉+++++++ (この語句はナシ)、…、

- …^①○〈竹〉中納言合子ノ不審サニ不食給ケレハ、…、…^②
 ▽〈平〉中納言合子ノ不審^{サニ}不^{サリケレハ}食、…、…^③
 〈享〉中納言合子ノ不審サニ食サリケレハ、…、…^④
 〈鎌〉中納言合子ノ不審サニクハサリケレハ、…、…^⑤
 〈竜〉猫間殿は合子のいふせさにめさゝりければ、…、…^⑥
 〈米〉中納言は余に合子のいふせさにめさゝりければ、…、…^⑦

〈天草版平家〉との比較においては、猫間殿に対する「食はれなんだれば」と言う尊敬表現に注意したい。これは〈竹柏園本〉とよく照合する。〈竜大本〉〈米沢本〉も同様である。〈平松本〉などにこの表現がない。

以上●[A]、●[B]の5項目を通して考えてみると、前者の(2) (27) (30)の3項目は皆〈平松本〉以外にもよく照応する諸本が存する。これに対して後者の2項目は、〈竹柏園本〉以外によく照応する例が見つけられない(3)と、照応するものが他に存する(4)とがある。

〈天草版平家〉の原拠本の本文を探求する上で、〈竹柏園本〉のように比較的長い文や語句が多く照応し、しかも4首の和歌の存在・順序・作者も一致する、●[B]の(3)の存在は重要である。他の現存諸本の中ではこれらの条件が整っているものは見つからない。(＊注1、＊注2)

しかし、〈竹柏園本〉は〈天草版平家〉の原拠本そのものではない。確かに表1の(27)の文の脱落や(30)の漢字の誤写から生じたものは、他の諸本には見つけられない。が、これらは〈天草版平家〉の原拠本の本文の生成に関わっていない。これに対して〈平松本〉に〈天草版平家〉と一致する本文が存し、他にも同じ文や語句を散見できる。

＊注1 表1の(3)の九月十三夜の月見の歌は、〈天草版平家〉には4首が存する。語り系の『平家物語』諸本には〈小城本〉を始め3首のものが多い。又、〈天草版平家〉の表4の[2]行盛の歌は〈竹柏園本〉以外に今は見当たらない。これは、はじめ渥美かをる氏が『平家物語の基礎的研究』の「平家物語の詞章の展開」で取りあげ、後に(清瀬：昭57)で引用されている。又、先行の〈屋代本〉はこの箇所^①に存する2首の中にこの歌を含んでいる。

(参考)左馬ノ守行盛ノ君スメハ是モ雲井ノ月ナレハ猶恋敷ハ都ナリケリ。国学院大

学蔵『屋代本平家物語』、貴重古典籍叢刊9（角川：昭53再）による。

*注2 本稿の「原拠本の本文の検証〔I〕〈早大本〉」参照。〈天草版平家〉の「世のため、家のため、国のため、君のため」という4つの語句の存在とそれらの順序が一致する『平家物語』の古写本を探求し、〈早大本〉を発見して〈天草版平家〉の本文追求のために重視した。

（四）〈竹柏園本〉〈平松本〉以外の諸本との関連

比較的短い語句については、〈竹柏園本〉〈平松本〉以外の諸本に両本よりもよく照応するものが見出される。

● [A] 一方流の諸本とよく照応する語句

八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉〈享禄本〉〈鎌倉本〉および百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉とよく照応せず、一方流の〈竜大本〉〈米沢本〉〈流布本〉などとよく照応する例を示そう。

- (1) 〈天〉兼康は主従ただ三人に討ちなされて逃げて行くを、①始め②北国で生け捕りにしたかの倉光またこれを生け捕りにせうと言うて、^{おほぜい}大勢の中を一町ばかり駆け抜け追ひ着いて、(214-10、巻八、妹尾の最期)
- 〈竹〉妹尾太郎只主従三奇(ママ)ニ討成レテ…落行程ニ、+++倉満次郎業澄…於_レ妹尾亦生取ニ仕候ハントテ、…、
- 〈平〉妹尾太郎只主従三騎_ニ被_レ討成…落行程_ニ、+++②此国_ニ+++妹尾_ニ出_テハ又生捕リ_ニ仕候_{ハムトテ}、…、
- 〈竜〉妹尾太郎た、主従三騎にうちなされ、…落行程に、+++②北国で妹尾いけとりにしたりし倉光次郎成澄(中略)妹尾においては又いけとり仕候はんとて、…、
- 〈米〉妹尾太郎た、主従三騎に被打成、…落て行、+++①去^{ヌル}②北国のた、かひの時妹尾生け捕りにしたりける倉光次郎成澄、…、今度も同は生捕にせんとて、…、
- 〈流〉瀬尾太郎只主従三騎ニ打ナサレ…、…落^クゾ行。①去^{ンヌル}五月②北国ニテ瀬尾生捕ニシタリケル、倉光次郎成澄ハ、…今度モ又瀬尾メニ於テハ、^{ナリズミ}虜^{ナリズミ}ニセントテ、…、(寛永3刊)
- 〈小〉〈鍋〉など：ナシ。

この例の下線部②「北国で」は、〈竜大本〉〈流布本〉(寛永3刊)などとよく照応して

いる。他に葉子本系の〈米沢本〉〈早大本〉〈楽歳堂本〉などに類似の語句が見られる。
〈小城本〉〈鍋島本〉などにはこの語句はない。

参考 ①「始め」は葉子本系の〈米沢本〉〈楽歳堂本〉などでは「去りぬる」の意の語
が対応している。

(2) 〈天〉都の代官に置かれた兼光^{かねみつ} 飛脚^{ひきやく}を立てて(木曾殿に)申したは：行家都にご
ざって、再々院へ参らせられて、木曾殿のことを議奏^{ぎそう}めさるるほどに、西
国の戦^{いくさ}をば先づ^いさしおかせられて、早う上らせられいと言ひやったところ
で：(216-24、巻八、室山)

〈竹〉…西国ノ軍ヲ 暫^{サシ}閣セ給テ 急キ上給へ…ト申ケレハ、

〈平〉…西国ノ軍ヲハ 暫^{サシ}閣セ給テ、急キ上セ給へ…ト申ケレハ、

〈竜〉…西国の軍をハ暫^{サシ}さしをかせ給ひて、いそきのほらせ給へ…と申しけれ
は、

〈米〉…西国の戦をハ先^{サシ}さしおかせ給て、急のほらせ給へ…と云ければ、

〈愛〉…西国の戦をハ先^{サシ}さしおかせ給て、急のほせられ給へ…と云ければ、

〈小〉+++ (ナシ) 、急キ上ラセ玉へ…ト申タリケレバ、

この例の「先づ」は、一方流の葉子本系〈米沢本〉の対応語句と一致する。〈内閣本〉
〈愛知県大本〉なども同じである。〈小城本〉〈鍋島本〉などにはこの語句はない。

(3) 〈天〉資盛の脚五百余騎で豊後の国へうち越えて、様々に調^{ととの}へられたれども、緒
方は一切同心せいで、あまっさへこの資盛をもそこで討ちはたしさうに
あったれども、(202-12、巻八、太宰府落ち)

〈竹〉…惟栄 更 不奉従、 +++ 公達をも 此処ニテ取籠可進候へトモ、

〈平〉…惟栄 ++ 奉^{ラス}レ従ヒ、 公達^{ヲモ}剩^{サハ} 所ニテ 取籠^ヲ可^レ進候^{ヘトモ}、

〈小〉…惟義 更ニ随イ奉ラズ、 君ヲモ聽テ 取籠奉ルベウ候ヘトモ (合字)、

〈竜〉…維義したかひたてまつらす、あまっさへ君達をも只今こゝてとりこめま
いらすへう候へとも、

〈慶〉…惟義 ++ 随奉ラス、 剩君達ヲモ 是ニテ 取籠参ラスヘウ候シカ
共、

〈米〉…維義随奉らす、剩君達をも唯今是にて取籠まいらすへう候へ共、

この例の傍線部「あまっさへこの資盛をも」とよく照応するのは、覚一本系の〈竜大
本〉〈慶長古活字本〉である。〈米沢本〉〈内閣本〉〈愛知県大本〉〈流布本〉(元和9刊)
などにも同じ語句が見られる。

他に次のようなものが見られる。

- 官、位に望みをかくるほどの人は…、(197-6)
- また平家は西国でこの事を伝へ聞いて、(200-4)
- のちには片田舎へ引込で命ばかりを生きてみせました。(226-15)

● [B] 百二十句本系の諸本とよく照応する語句

八坂流甲類の〈竹柏園本〉〈平松本〉〈享禄本〉〈鎌倉本〉および一方流の〈竜大本〉〈米沢本〉などによく照応せずに、百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉などによく照応する語句の存する例をあげる。

- (1) 〈天〉(猫間殿といふ人が木曾の宿所へ行って談合しようとした。郎等がその由を告げると)木曾は大きに笑うて、①何?猫でありながら、人に見^{げんざん}参せうと言ふかと、言はれたれば:②いや、これは猫間殿と申して、公家でござると言うたれば、(206-9、卷八、猫間)

〈竹〉…、人々 猫間殿トテ、公卿ニテ渡ラセ給候、…。

〈平〉…、是ハ猫間殿ニテ、公卿ニテ渡ラセ給候、…。

〈小〉…、左ハ候ワズ、是ハ猫間殿ト申ス上臈ニテマシ、候、…。

〈鍋〉…、さは候はず、これはねこ殿と申 上らうにてまし、候、…。

〈竜〉…、猫間の中納言と申 公卿てわたらせ給ふ、…。

〈米〉…、是は猫間中納言と申 公卿にてわたらせ給といひければ、…。

- (注) ①「何?」〈感動〉下の反語の言い方と呼応して、持ちかけられた事態を峻拒して言う語。『時代別国語大辞典』室町時代編四(三省堂、平12刊)による。

②下線部「いや(否)」は否定する意を表す応答の語。百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉などによく照応する語句「さは候はず」が見出される。

- (2) 〈天〉木曾は法皇の御気色が悪しうなると聞こえたれば、五畿内の兵ども始めは木曾に從うたが、みな木曾を背いて法皇のお方へ参った。(220-5、卷八、裁判官)

〈竹〉+++、五畿内ノ兵共 始ハ 木曾ニ随付タリシカ、皆+++背テ法住寺殿エ参ル。

〈平〉+++、五畿内ノ兵ノトモ始ハ木曾ニ随イタリケルカ、皆+++背テ院ノ方へ参。

〈小〉+++、木曾ニ随ヒタル 五畿内兵トモ、皆木曾ヲ背テ院方ニ参ル。

〈鍋〉+++、木そにしたがひたる 五きないのつはものども、みな木そをそむるてゐんのかたへまいる。

〈竜〉+++、木曾にしたかふたりける五畿内の兵とも、皆+++そむるて院方へまいる。

〈米〉+++、五畿内の者ともは、皆木曾に随付たりしか共、院の御気色内々あしうなると聞えしかは、皆木曾を背て院へまいる。

下線部の「木曾を」に対応する語句が〈竹柏園本〉〈平松本〉にはない。〈小城本〉をはじめ〈鍋島本〉などの百二十句本系の諸本や葉子本系の〈米沢本〉〈内閣本〉に見出される。

(3) 〈天〉牛飼①この分では悪しからうず：②中直りをせうと^{せう}思うて、(208-3、巻八、猫間)

〈竹〉牛飼++++、中直セントヤ思ハレケン、

〈平〉牛牧^{カウ}++++、+++++中_リ(ママ)直サム_{トヤ}思_{ケム}、

〈小〉牛飼悪シカリナン、+++++トヤ思ヒケン、

〈鍋〉うしかひあしかりなん、+++++とやおもひけん、

〈竜〉牛飼++++、なかなをりせんとや思けん、

〈米〉牛飼木曾に+++++中なをりせんとや思けむ、

下線部の①「この分では悪しからうず」に対応する語句が〈竹柏園本〉〈平松本〉にはない。〈小城本〉〈鍋島本〉などの百二十句本系の諸本によく照応する語句が見られる。しかし、それに続く②「中直りをせう」に対応する語句が〈竹柏園本〉〈平松本〉や〈竜大本〉〈米沢本〉に存するのに〈小城本〉〈鍋島本〉には見られない。〈天草版平家〉の本文の形成に〈小城本〉などの百二十句本系の諸本と八坂流甲類本(または一方流諸本)が関係しているであろうと考えられる。

[B]の3例は、下線部では〈竹柏園本〉や〈平松本〉よりもよく照応する。それ故、〈小城本〉〈鍋島本〉と同じ語句を有するものが、校合などの方法で原拠本の本文の形成に関与したのではないかと推測するのである。

[A]の3例は、一方流の〈竜大本〉などの本文が百二十句本系の〈小城本〉などよりも原拠本に近いと、[B]のような顕著な傾向が見られない。しかし、このような操作が行われたと仮定しても、それと矛盾するものではない。

(五) むすび

該当の範囲(『平家物語』の巻八に相当)の前後の範囲(『平家物語』の巻四～巻七、巻九～巻十二に相当)の原拠本は、〈斯道本〉の第二次本文の類に、一方流の〈竜大本〉

に近いもの及び八坂流甲類の〈竹柏園本〉に近いものに存する語句や表現が、校合などの方法で取り入れられたものであろう。

該当の範囲の原拠本を〈斯道本〉に近い本文を有する〈小城本〉〈鍋島本〉と比較してみると、対応する部分が両本に存しない、又は存してもよく照応しない、という箇所が目立つ。〈平松本〉など他の六本を加えて、文や語句の比較的長い部分で諸本間に相違のある箇所を取り上げて対校してみても、両本がよく照応するのはきわめて少ない。これは前後の範囲と同種のものが用いられていないことを示している。

よく照応する箇所の多いのは〈平松本〉〈竹柏園本〉である。このうちの片方がよく照応すると言えない少数の箇所は、他方がよく照応する。が、両本ともよく照応すると言えない箇所も存する。それ故、両本の一方を基幹として原拠本の本文が形成されたと考えすることはできない。又、原拠本と両本とは一直線上に並ぶのではなく、互いに近い位置に鼎立していると例えるべき性質のものである。

比較的短かい語句については、〈竹柏園本〉〈平松本〉よりもよく照応するものが一方流の〈竜大本〉〈米沢本〉など、又は百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉などに見出される。このことは、これらの系統のものが原拠本の該当の範囲の本文の形成において、校合などの方法で関与している可能性を示すものであろう。

〈天草版平家〉の原拠本そのものは、いまだ発見されていない。該当の範囲では、原拠本にきわめて近い本文を持つものさえ発見されていない。そのため、現存の『平家物語』諸本の中から原拠本に近い、又は関連すると考えられるものをあげて、それらとの関係を推測した。

原拠本またはそれにきわめて近いもの、例えば前後の範囲における〈斯道本〉のようなものが発見されれば、該当の範囲においても〈天草版平家〉の本文と原拠本との関係を一層正確に把握することができよう。が、そのような状況は未だ考えられない。

九月十三夜、珠^ニ為^ル夕月ナ^リト其夜都^ノ思^ハ出^ル泪^ニ吾^ノ中^ニラ
陸^チ亮^ナ久^ク久^ク重^クウ^リ上^リ久^ク堅^ク月^ノ思^ハ伏^ス類^モ今^ノ様^ニ覺^テ徹^テ理^ス
六^ノ火^ノ経^テ哉

戀^シト^テ去^リ年^ノノ^レ夜^ノ終^ル夜^ノ界^シ人^ノ思^ハ出^ルレ^ド

左馬頭幸哉

君^ハ佳^ク夏^モ雲^井月^ナレ^ト猶^モ恋^シキ^ハ都^ナリ^ケリ

薩摩守忠度

月^ヲ見^シ去^リ年^ノ今^宵ノ^友ノ^都ニ^吾ノ^思ト^出レ^ド

皇居宮亮経正

今^ノ越^ノ野^邊ノ^露ト^モ消^スシ^テ思^ハ久^ク月^ヲ見^レ哉

緒方三郎惟成幸

第六章 あとがき

〈天草版平家〉の本文を作成するために口語訳の原拠にした『平家物語』（原拠本）の探求と研究がこの稿の目的であった。長い間にわたる諸先学の研究の成果を学び、私自身も『平家物語』の古写本・古刊本の追求を続け、〈天草版平家〉との本文の比較対照を重ねた。合わせて又語彙・語法の研究のため『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』『天草版平家物語語彙用例総索引』を作成して刊行した。

第一章の表1で〈天草版平家〉の原拠本の本文と現存の『平家物語』（十二巻本）の諸本との関係を示した。

[イ] の範囲は『平家物語』（巻一～三）

[ロ] の範囲の前部は『平家物語』（巻四～七）

[ロ] の範囲の後部は『平家物語』（巻九～十二）

[ハ] の範囲は『平家物語』（巻八）

第二章で「二系統と一補足」と記したのは、[イ] [ロ] と [ハ] の意味である。

[イ] の範囲の原拠本は一方流の覚一本系統のものが主軸である。清瀬良一氏は〈天草版平家〉巻Iに相当の部分が〈竜大本〉、巻II第1章に相当の部分が〈西教寺本〉とし、「一方流諸本の総合的書き入れ校合本」と考定した。これに対して私は一方流の〈竜大本〉の類に〈早大本〉の類、および百二十句本系の〈斯道本〉の類が校合などの形で関与したと推測した。特に4つの語句（世・家・国・君）と順序が〈天草版平家〉と一致する〈早大本〉を発見し、重視した。又、関与した百二十句本系の原拠本は漢字・片仮名交じりの〈斯道本〉の類であることをも検証した。（詳細は第二章（五）参照）

[ロ] の範囲の前部は〈斯道本〉の二次本文（断片）が〈天草版平家〉に最も近い。清瀬氏は原拠本と同じ本文だと主張した。しかし、きわめて重要な視点からの検証を欠いている。それは〈天草版平家〉の語句が対応する〈斯道本〉の一次・二次の両本文の語句を口語訳したものではないと考えられる例の存在（4例）を考慮していないことである。私は第四章（三）によって原拠本の本文は〈斯道本〉の類を基軸にして〈竜大本〉の類の語句が校合などによって成立したものと考えた。

[ロ] の範囲の後部は〈斯道本〉を〈天草版平家〉の本文と比較すると、一致または照応する語句がかなり多い。が、よく照応すると言えないものも存する。これらを整理・分析した結果、前部と同様に〈斯道本〉の類を基軸にして〈竜大本〉の類の語句が校合

などによって成立したものと推測した。(詳細は第四章(四)参照)

[ハ]の範囲は『平家物語』の巻八が相当する。前後の範囲の原拠本は、〈斯道本〉の第二次本文の類に、一方流の〈竜大本〉の類に存する語句や表現が、校合などの方法で取り入れられたものであろう。

しかし該当の範囲の原拠本は〈斯道本〉が巻八を欠いているため、それに近い本文を有する〈小城本〉〈鍋島本〉で代用して比較・照応してみた。けれども、対応する部分が両本に存しない、又は存してもよく照応しない、という箇所が目立つ。これは前後の範囲と同種のものが用いられていないことを示している。

この範囲の解明には、一つには文や語句の統計的比較を試みた。もう一つには月見の歌の4首について、作者と順序が一致するものを探求した。そこで、これまでの調査・研究をもとにして関係の深い『平家物語』の古写本・古刊本を8本選んだ。よく照応する箇所の多いのは〈竹柏園本〉〈平松本〉である。比較的短かい語句については、〈竹柏園本〉〈平松本〉よりもよく照応するものが一方流の〈竜大本〉〈米沢本〉など、又は百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉などに見出される。このことは、これらの系統のものが原拠本の該当の範囲の本文の形成において、校合などの方法で関与している可能性を示すものであろう。(詳細は第五章(三)(四)参照)

(参考)〈天草版平家〉の本文を原拠本に関連すると思われる『平家物語』諸本と比較・対照してみた。が、〈竹柏園本〉の類の文や語句が校合などで[イ][ロ]の範囲の原拠本の本文の成立に関与しているかどうかは明確でない。それは次の二つの理由からである。

- 1 比較の対象が十二巻本の巻八だけでは短い。
- 2 〈竜大本〉の類・〈斯道本〉の類と比較して、〈竹柏園本〉は原拠本との隔たりが大きすぎる。

(追記)この稿では〈天草版平家〉の原拠本の探求と研究を、口訳者の不干ハビヤンが序文で述べた指針に忠実に従って進めた。今後は他の視点からの考究も進めた。

- 1 〈天草版平家〉(大英図書館蔵)の扉には1592年(文禄元年)天草学林で長老の御免許として出版(板に刻む)とある。そして、序文(読誦の人に対して書す)に1592年12月10日、不干ハビヤンと記されている。この頃のハビヤンは27歳、イルマンとして外国人宣教師たちに日本語を教えていた。

2 〈天草版平家〉の原拠本に関する『平家物語』の重要な現存本

▼ [ロ] の範囲

- a 〈斯道本〉(〈斯道文庫本〉とも)〔室町後期写本〕で、「平戸藩蔵書」「子孫永宝」「楽歳堂図書記」の方形の朱印がある。平戸城主松浦静山の収書で、「楽歳堂蔵書目録」には「平家物語木佐木本十一冊」とある。
- b 〈小城本〉〔慶長写本〕、十一冊(巻十一は欠)、鍋島加賀守直茂(1538-1618)所持の写本で「紀伊」の印記がある。巻十二の末に鍋島加賀の守直茂と記す、現在は佐賀大学小城鍋島文庫蔵。
- c 〈鍋島本〉〔江戸初期写本〕、鍋島家旧蔵本、現在は天理図書館蔵。「鍋島氏蔵書」の墨印がある。

▼ [ハ] の範囲

- a 〈竹柏園本〉 佐佐木信綱氏旧蔵、現在は天理図書館蔵。
- b 〈平松本〉(〈平松家本〉とも)〔室町後期写本〕、佐賀県神埼郡神埼町の仁比山山王社(神社)所蔵で、伝領者は豪澄と記されている。現在は京都大学付属図書館蔵。

山下宏明氏は『平家物語竹柏園本』の解説で、これらの多くが北九州中心に書写された諸本である、他の諸本に見られない伝承資料を有している、という2点を指摘されている。参考にしたい。

付録(1) 『平家物語』 諸本とその略称・略号

(『天草版『平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』で調査したものを一部掲載する。)

- ◇〈天草版平家〉〈天〉 天草版『平家物語』大英図書館蔵、原本・影印本(勉誠社文庫⑦⑧)。

原本はローマ字綴りであるが、便宜上、漢字平仮名交りに翻字して示した。

- ◇〈天草版伊曾保〉〈天伊曾〉 天草版『伊曾保物語』原本は大英図書館蔵で同上と合冊。影印本(勉誠社文庫③)。

○一方流

▽覚一本系〈覚〉

〈竜大本〉〈竜〉 竜谷大学付属図書館蔵、影印本、写真。(「祇王」の章は欠。日本古典文学大系『平家物語』上(岩波書店、昭34刊)は〈高野本〉で補う)。

〈高野本〉〈高〉 東京大学国語研究室蔵、原本、影印本(『高野本平家物語』笠間書院、昭49刊)。

〈西教寺本〉〈西〉 卷一は大東急記念文庫蔵、原本。卷二以降は西教寺蔵、山下宏明氏所持の写真。

〈熱田本〉〈熱〉 前田育徳会尊経閣文庫蔵、影印本。

〈駒大本25〉〈駒25〉 駒沢大学付属図書館(沼沢文庫)蔵、原本。

〈学習院本2〉〈学2〉 学習院大学国語学国文学研究室蔵、原本。

〈陽明本〉〈陽〉 陽明文庫蔵、写真(国文学研究資料館で確認)。

〈田安本〉〈田〉 天理図書館蔵、写真。

〈慶長古活字本〉〈慶古〉 大東急記念文庫蔵、写真。

▽菓子本系〈葉〉

〈米沢本〉〈米〉 米沢市立図書館蔵、写真。

〈駒大本29〉〈駒29〉 駒沢大学付属図書館(沼沢文庫)蔵、原本。

〈広大本〉〈広〉 広島大学文学部蔵、写真。

〈早大本〉〈早〉 早稲田大学付属図書館蔵、原本。田中穂積氏寄贈(昭和20.11.10.)。

〈京資本14〉 京都府立総合資料館蔵、写真。

〈愛知県大本〉〈愛県〉 愛知県立大学付属図書館蔵、原本・写真。卷六後半・卷七・卷十・卷十二は下村本の本文。

〈内閣本〉〈内〉 内閣文庫蔵、写真。

▽下村本系〈下〉

〈加賀本〉〈加〉 東京都立中央図書館蔵、原本。

〈筑大本 11〉〈筑 11〉 筑波大学付属図書館蔵、写真。

〈筑大本 12〉〈筑 12〉 筑波大学付属図書館蔵、写真。

〈筑大本 49〉〈筑 49〉 筑波大学付属図書館蔵、写真。

〈静嘉堂平仮名十行本〉〈静平〉 静嘉堂文庫蔵、原本。

〈静嘉堂片仮名本〉〈静片〉 静嘉堂文庫蔵、原本。

〈東大国文本 9〉〈東大 9〉 東京大学国文研究室蔵、写真。旧楽歳堂文庫蔵。

〈康豊本〉 彰考館蔵、原本・写真。

〈昭女大本〉〈昭女〉 昭和女子大学付属図書館蔵、原本。

〈駒大本 26〉〈駒 26〉 駒沢大学付属図書館（沼沢文庫）蔵、原本。

〈学習院本 3〉 学習院大学国語学国文学研究室蔵、原本。

▽流布本系〈流〉

〈学習院本 4〉 学習院大学国語学国文学研究室蔵、原本。

〈駒大本 27〉〈駒 27〉 駒沢大学付属図書館（沼沢文庫）蔵、原本。

〈国会本・流〉〈国会・流〉 国立国会図書館蔵 原本。

〈元和 7 刊〉 元和七年刊本（1621）早稲田大学付属図書館蔵、原本。

〈元和 9 刊〉 元和九年刊本（1623）大東急記念文庫蔵、写真。

〈寛永 3 刊〉 寛永三年刊本（1626）武生市立図書館蔵、写真。

〈万治 2 刊〉 万治二年刊本（1659）神宮文庫蔵、写真。

〈元禄 12 刊〉 元禄十二年刊本（1699）愛知県立大学付属図書館蔵、原本。

〈享保 12 刊〉 享保十二年刊本（1727）『改正絵入平家物語』高松松平文庫蔵、写真。

▽平曲譜本

波多野流〈東大本〉 波多野流〈東〉 東京大学付属図書館蔵、原本。

波多野流〈京大本〉 波多野流〈京〉 京都大学文学部蔵、影印本。

波多野流〈静嘉堂本〉 波多野流〈静〉 静嘉堂文庫蔵、原本。

平家正節〈尾崎本〉〈正尾〉 尾崎正忠氏蔵、原本・影印本。

平家正節〈東大本〉〈正東〉 東京大学付属図書館蔵、原本。

平家正節〈京大本〉〈正京〉 京都大学文学部蔵、影印本。

○未分類

〈太山寺本〉 太山寺蔵、影印本（汲古書院、昭 61 刊）。混態本であるが、巻二は
覚一本に近い。

◇百二十句本など

〈斯道本〉〈斯〉 慶応義塾大学付属斯道文庫蔵、原本、影印本（『百二十句本平家
物語』昭 45 刊）。〈斯〉一：同上第一次本文。〈斯〉二：同上第二次本文。

〈小城本〉〈小〉 佐賀大学付属図書館蔵、影印本（『小城鍋島文庫本平家物語』汲
古書院、昭 57 刊）。

〈鍋島本〉〈鍋〉 天理図書館蔵（鍋島家旧蔵）、写真。

〈国会本・百〉〈国・百〉 国立国会図書館蔵、写真・影印本。

〈京都本〉〈京〉 京都府立総合資料館蔵、写真。

〈久原本〉〈久〉〈佐賀本とも〉 佐賀県立図書館蔵、影印本（二松学舎大学出版部、
昭 60 刊）。

〈竹柏園本〉〈竹〉 天理図書館蔵、影印本（天理大学出版部、昭 53 刊）。

〈平松本〉〈平〉（平松家本とも） 京都大学図書館蔵、影印本（古典刊行会、昭 40
刊）。室町時代末期書写。

〈享禄本〉〈享〉 『享禄書写鎌倉本』文化庁蔵、影印本（汲古書院、昭 47 刊）。

〈鎌倉本〉〈鎌〉 『鎌倉本平家物語』彰考館文庫蔵、影印本（汲古書院、昭 47 刊）。

〈屋代本〉〈屋〉 国学院大学付属図書館蔵、影印本（『屋代本平家物語』貴重古典
籍叢書 9（角川：昭 53 再））。

○増補系

〈延慶本〉（大東急） 大東急記念文庫蔵、原本。影印本（『延慶本平家物語』汲古
書院、昭 58 刊）。

付録(2) 著書・論文の注記など

(本稿に直接記さなかったものも一部掲載する)

(サトウ：明 21) アーネスト・M・サトウ『日本耶穌会刊行書誌』(Jesuit Mission Press in Japan) 私版本。復刻版は警醒社書店、大 15 刊。

(新村：明 42) 新村出「天草出版の平家物語抜書及び其編者について」『史学雑誌』明 42・9～10 掲載。

(山田：明 44) 山田孝雄著『平家物語考』国定教科書共同販売所。

(亀井：大 15) 亀井高孝翻字「天草本平家物語抄」雑誌『芸文』大 15・3～12 掲載。

(亀井：昭 2) 亀井高孝翻字『天草本平家物語』岩波書店。

(土井：昭 9) 土井忠生著『近古の国語』(国語科学講座 31) 明治書院。

(高橋：昭 18) 高橋貞一著『平家物語諸本の研究』富山房。

(高橋：昭 24) 高橋貞一著『平家物語』(新註国文学叢書) 上 講談社。

(渥美：昭 37) 渥美かをる著『平家物語の基礎的研究』三省堂。

(京大：昭 38) 京都大学国語国文学研究室編『文禄二年耶穌会板伊曾保物語』(翻字を参照)

(原田：昭 38・6) 原田福次「天草版平家物語の底本について——巻一・巻二(祇王)まで——」『国語国文研究』(北海道大) 25 号。

(清瀬：昭 39・3) 清瀬良一「天草版平家物語の原拠覚書」『国文学攷』(広島大) 33 号。

(麻生：昭 40・3) 麻生朝道「天草版平家物語巻 2 の 2 から巻 3 までの底本について」『人文紀要』(佐賀大) 1 号。

(風間：昭 40・11) 風間力三「天草版平家物語の口訳原典」(上)『甲南大学文学会論集』28 号。

(亀井・阪田：昭 41) 亀井高孝・阪田雪子(翻字)『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』吉川弘文館。

(麻生：昭 42・3) 麻生朝道「天草版平家物語巻 4 の 16 から 20 までの底本について」『文学論集』(佐賀大) 8 号。

(山下：昭 43) 山下宏明「平家物語百二十句本再考」、古典文庫『平家物語百二十句本』四に所収の解説。

(吉川：昭 44) 亀井高孝編『天草版平家物語』影印本。吉川弘文館。

(汲古：昭 45) 『百二十句本平家物語』慶応義塾大学付属斯道文庫蔵本の影印。汲古書院。

- (山下：昭 47) 山下宏明著『平家物語研究序説』明治書院。
- (岩波：昭 52) 『国書総目録』岩波書店。
- (鎌田：昭 54・9) 鎌田広夫「天草版平家物語の底本について——巻一及び巻二第 1 の場合——」『米沢国語国文』6 号。
- (清瀬：昭 57) 清瀬良一著『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社。
- (山下：昭 59) 山下宏明著『平家物語の生成』明治書院。
- (鎌田：昭 59) 鎌田広夫「天草版平家物語の依拠本についての考察——斯道本巻八の欠巻を補ふもの——」『東洋学研究所集刊』(二松学舎大) 昭和 58 年度版所収。
- (遠藤：昭 60・3) 遠藤潤一「天草版平家物語小考——清瀬良一氏の『天草版平家物語の基礎的研究』について——」『鈴木弘道教授退任記念国文学論集』(和泉書院) 所収。
- (近藤：昭 60・7) 早稲田大学付属図書館にて〈早大本〉を発見。図書番号(門：リ 5 / 号：6170 / 巻：2)。
- (近藤：昭 61・7) 近藤政美「天草版平家物語巻 I と平家物語百二十句本系諸本との語句の照応について」『名古屋大学国語国文学』58 号。
- (近藤：昭 61) 近藤政美「天草版平家物語巻 II 第 1 章(祇王)と平家物語百二十句本系諸本との語句の照応について」『松村博司先生喜寿記念国語国文学論集』(右文書院) 所収。
- (江口：昭 61) 江口正弘編『天草版平家物語の本文及び総索引』明治書院。
- (近藤：昭 62・2) 近藤政美「天草版平家物語巻 I・巻 II 第 1 章(祇王)の原拠本の本文の形成に関与した百二十句本系の平家物語について——遠藤論文の批判——」『説林』(愛知県立大学) 35 号。
- (遠藤：昭 62・12) 遠藤潤一「天草版平家物語小考(その 2)」『奈良大学紀要』16 号。
- (近藤：平 2・12) 近藤政美「天草版平家物の原拠本について——巻 II 第 2 章から巻 III 第 8 章までと、巻 IV 第 2 章から第 28 章までの範囲——」『名古屋大学国語国文学』67 号。
- (近藤：平 4・2) 近藤政美「天草版平家物語の原拠本について——巻 III 第 9 章から巻 IV 第 1 章まで——」『愛知県立大学文学部論集』45 号。
- (近藤ほか：平 8、9) 近藤政美ほか『平家物語(高野本)語彙用例総索引』(自立語篇)(付属語篇) 勉誠出版。
- (鎌田：平 10) 鎌田広夫著『天草版平家物語の語法の研究』おうふう。
- (近藤ほか：平 11) 近藤政美ほか『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版。
- (福島：平 15) 福島邦道著『天草版平家物語叢録』笠間書院。

(近藤：平 20) 近藤政美著『天草版平家物語の原拠本、および語彙・語法の研究』和泉書院。

(小林：平 21・10) 上項の近藤著『天草版平家物語の原拠本、および語彙・語法の研究』に対する小林千草氏の書評。『日本語の研究』第 5 卷 4 号掲載。

補遺 (18 頁の説明のための〈陽明本〉〈早大本〉の本文の対照)

d「さりとも」に続く語句 (〈天草版平家〉 54-17~21)

▼、+++は〈天草版平家〉と比較して存しない部分を示す。

〈天草版平家〉 わが世にあったほどは、従ひ付いた者ども一二人人も
△陽明本〈覚 4〉わか世なりし時は、したかひついたりし者共一二千▼も
●早大本〈葉 2〉我世にありし時は、^{したかひつき}随 たり▼者共一二人も

〈天〉あらうずるに、今は余所^{よこ}ながらもこのあり様を見送る者の
〈陽〉有つらん▼、いまはよそにてたに此有様を 見送るもの、
〈早〉ありつらん、今はよそにてたにこの有様を 見をくる者の

〈天〉ないことの悲しさよとて、泣かれたれば：
〈陽〉なかりけるかなしさよ、++++++ (脱)
〈早〉なかりけるかなしさよとて、なかれければ、